労働者ブックレット 2

Xデーと天皇制

——今こそ天皇制をなくせ

1988-12

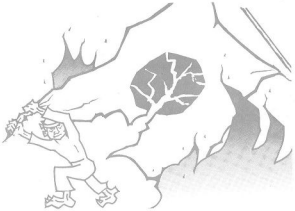
現代社

Xデーと天皇制

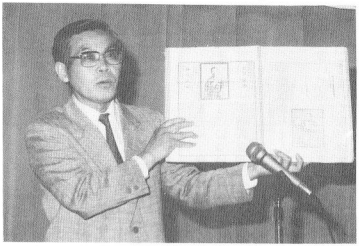
—今こそ天皇制をなくせ

1988-12

労働者ブックレット 2



定価600円



4・29反天皇集会で講演する戸村政博氏

Xデーと天皇制

戸村　政博
（日本キリスト教団
靖国問題特別委員会委員長）

（88年4・29反天皇集会での講演）

レジメ（見出しのみ掲載）

Ⅰ　Xデーと国民管理
Ⅱ　Xデーと歌舞音曲の停止
Ⅲ　Xデー・デモンストレーション
Ⅳ　一九二八（昭和三）年という年
Ⅴ　Xデーと戦争責任

労働者ブックレット　2

Xデーと天皇制——今こそ天皇制をなくせ

目　次

Xデーと天皇制　3
戸村　政博
開始されたXデー攻撃　26
豊浦　作造
日本列島を揺るがした
反天皇十月決起　36
反天皇の闘いに報復ねらう
〝不敬罪〟—天皇弾圧　40
今世紀最大の戦犯ヒロヒト　42
天皇制と沖縄支配　49
浜辺　比等志
天皇制と部落差別　57
高市　結実
資料　66
戦争推進、居直りのヒロヒトの言辞
Xデーに関する外国新聞報道

扉写真　Xデー攻撃と対決し、知花昌一氏講演会を圧倒的に実現（11月5日　明治大学駿河台校舎）

Xデーから大嘗祭まで

いま、沖縄の映画を見まして、わたしも読谷村に行ってまいりましたが、あのチビチリガマの中に入ってみますと、戦争がきのうの終わったような、そういう生々しい印象を受けます。実際に、戦争はきのう終わったばかりだというのが、わたしは本当でなければならないと思います。

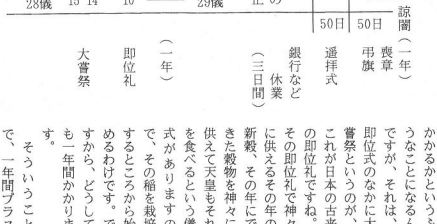
今日は、Xデーのことを主に、今後展開される天皇制攻勢、攻撃、そういうことについて、わたしたちがあらかじめそのだいたいの輪郭を知っておくことが、わたしたちの闘いを組むうえで大きな役目を果たすと思いますので、一時間ばかりそんなことを話してみたいと思います。

レジメの中に書いてあることにそってお話したいと思いますが、ここに書いてなかったことをこの黒板に張っておきました。

はじめに、ご存じの方もあると思いますが、Xデーという時に、だいたいどのくらいの時間幅が考えられるのか。もちろんXデーというのは一日でありますが、その一日のことを問題にしているのではありません。で、どれくらいの期間があとに続くのかということを、最初にちょっと申しあげてみたいと思います。

この黒板に出ていますように、Xデーがまいりますと、その日のうちに即位と改元、元号を改める、そういうことがただちにおこなわれまして、そしてその日から一年間の喪に入るわけです。二十九種類の儀式が天皇の葬儀が、大正の場合ですと、二十九種類の儀式が一年間かかっておこなわれます。一年間の葬儀というのは、非常に最大の丁寧さをもっておこなわれるわけですが、わたしたちの葬儀と同じように、納棺、通夜、それから告別式、火葬、埋葬、天皇の場合は火葬しないんですが、そういう順序をふんでおこなわれるわけであります。で、この一年間の葬儀のなかで山場にあたるところが、大正天皇の場合、十二月二十五日に亡くなりまして、二月の七日に葬儀が新宿御苑でおこなわれました。ちょうど四十五日めですね。ですから、葬儀の場合は、はじめの四十五日間くらいが山場になるのではないかと思われます。

そして、その葬儀が終わりますと、次の年の春から即位大礼というのがおこなわれます。で、これもまた一年間かかります。即位式をするのにどうして一年間



かかるかというふうなことになるんですが、それは、即位式のなかに大嘗祭というのが、これが日本の古来の即位礼ですね。その即位礼で神々に供えるその年の新穀、その年にできた穀物を神々に供えて天皇もそれを食べるという儀式がありますので、その稲を栽培するところから始めるわけです。ですから、どうしても一年間かかります。

そういうことで、一年間プラス一年間で二年間、最低二年間はこの天皇の大デモンストレーションの季節が続くわけです。けれどもそれは、大正天皇は年末に亡くなりましたので、単純に二年となるのですが、もし八月にXデーがきますと、喪が明けるのがその次の年の八月、即位大礼はいま申しましたように春から稲の栽培を始めますから、八月に終わっても翌年の春まで待つわけですね。そしますと天皇の季節は二年半くらいになります。そしてまた、今度の場合は、多分、天皇のXデーにつづいて皇后のXデーが続く可能性が非常に強いわけです。そうしますと、ちょっと計算が正確にできなくなりますが、三年あるいはそれ以上の期間、確実に天皇の季節のなかに日本社会全部がとりこめられていく。テレビその他マスコミの天皇情報が、執拗に一方的に送られてくるような状況が出てくると思います。そして天皇制批判のような言葉は、そういう主張は、だんだん影をひそめていくんじゃないかというようなことが非常に心配されるわけです。ですから、Xデーというときに、だいたい三年くらいの期間を覚悟して粘り強く闘いつづけていく。

ごく簡単に申しますと、こういう長い暗いトンネルに、いまちょうど入ろうとしているような時期ではな

いかと思いますね。入る前には列車の中に灯りが点いておりますけど、トンネルに入ると同時に真っ暗になりまして、そして流される情報は車掌からの一方的な情報だけ、そしていつトンネルが終わるのか、いつ明るいところに出るのかわからないような状況のなかで、暗い列車のなかに日本列島全部がとじこめられていく、こういうふうなことではないかと思うんですね。ですから、たとえ暗くても、このXデーがどういうふうに経過して、どういうふうな攻撃がしかけられていくかということをはっきりと知っている国民、そして、そういう間違った一方的な情報に流されない主体的な気持ちを持っている国民が多ければ多いほど、この闘いに勝利できると思います。ですから、学習ということが非常に大切になると思います。大体そんなことを申しあげまして、このレジメにしたがって、この話をしてみたいと思います。

暗と明のリズム

最初のところは、いま申しました三年間の季節、これをよく考えてみますと、非常に巧みなリズムによってこれが一貫している。これは、そのように別に仕組んだわけではありませんけど、自然にそうなっているわけです。それは、このレジメにも書いておきましたけど、こういうふうな黒、白、黒、白というこのリズムですね。つまり、Xデーがきますと、一年間の喪が始まりますから、これは非常にしめやかな季節であります。諒闇（りょうあん）というのは、昔の漢字でたいへん難しいことばですが、「まことにくらし」とこれは読むんですね。そういう意味なんです。天皇が死んだ日本の社会全部喪に服して暗い時期になる。

そして、その一ヵ年が終わりますと、その次に即位の季節節きまして、この即位は何といっても新しい天皇の即位の披露ですから、たくさんの人が祝賀をする、お祝いをする、町中でお祭騒ぎをする、行列をする、ちょうちん行列をするということが続きまして、国中が祝賀にあふれる季節であります。

その次に浄闇（じょうあん）と書いてありますのが大嘗祭のことですが、大嘗祭という祭はおこなわれるんですね。天皇の即位式が、日本では昔から真夜中におこなわれたんです。その大嘗祭の前即位礼というのが、これが昼間の即位礼ですね。これが昼間、外国の人たちも招いてにぎやかにおこなわれますが、そ

の昼の即位礼のあとで、こんどは夜の即位礼がおこなわれます。これは純粋な神道の儀式です。宗教的な儀式です。夜の八時ごろから始まりまして、翌朝の六時ころまでまったくの徹夜でおこなわれます。ですから真っ暗な世界ですね。そして、この篝灯のような、近代的な意味での灯りを全然使いません。たき火とか、仏さまによく使う灯明の灯しと言いますね、本当にほの暗い灯し、そういうものでおこなわれますので、昔から浄闇という、きよらかな闇ということばが日本ではできております。で、これは別に悲しみの意味の黒ではありませんが、厳粛な黒という意味で、真っ暗な世界でおこなわれる儀式、おそらくテレビでその幾分かは放映されると思います。

その大嘗祭が終わる時が大饗（だいきょう）といわれる祝宴ですね。宮中で開かれる宴会であります。地方の各都市でもそれにあやかっておこなわれますが、その祝宴は、お酒も出まして、非常にみんながにぎやかに、三年近くの天皇の季節の最後のフィナーレとして、それがおこなわれるわけです。

そうしますと、暗と明が実に巧みに交代しているというリズムができております。これが反対で、明、暗、明、暗ですと、ちょっと様（さま）にならないですね。暗、明、暗、明ですから、このリズムのなかにとりこまれた国民はですね、三年間という実に長い季節を別に長いとも思わないで、天皇情報にとりかこまれて、終わった時にはすっかり天皇賛成者、天皇制賛成者になっているというふうなことが考えられるわけです。で、このリズムはどうしようもないリズムでありますけれども、そのことをわたしたちが心得ているといないとでは、たいへん違いだろうと思います。

即位と改元

そして、この二番めのところは、そういうリズムのなかでおこなわれることを、もう少し細かに考えてみますと、まず第一に、天皇が亡くなりますと、その日

●――○――○――○

諒闇（りょうあん）　即位（そくい）　浄闇（じょうあん）　大饗（だいきょう）

（豊の明り）

のうちに、その日のうちというよりは、天皇が亡くなりましたらただちに、その場所で即位と改元がおこなわれます。その即位というのは、三種の神器という、これも一々説明しなければならないんですが、とにかく鏡と勾玉と剣と、こういうのがないと天皇が天皇である資格にならないというふうなことがありまして、この三種の神器をうけわたす儀式が天皇の亡くなった場所でおこなわれます。そして、皇太子がそこで天皇に就任するわけです。

この、なぜそんなに急がなければならないかということですけど、これは、皇室典範の第四条というところに「天皇が崩じたときには、皇嗣が直ちに即位する」ということが書いてあります。「ただちに」ということばは、法律にあまりなじまないことばが、そこに入っているわけですね。これは、昔の皇室典範には「天皇崩じたるときは、皇嗣すなわち践祚し、祖宗の神器を承く」と、「皇嗣すなわち」というのがその「ただちに」という昔のことばなんですね。ですから「ただちに」ということばが、そういうふうに継承されて、皇室典範にのっております。

なぜ、そんなにただちにやらなければいけないのか。事実、明治天皇が亡くなりましたのが七月三十日の午前零時四十三分、大正天皇が即位しましたのが午前一時、十七分後ですね。大正天皇が亡くなりましたのが十二月二十五日午前一時二十五分、昭和天皇が即位しましたのが午前三時十五分、ちょうど二時間五十分後、ですから、文字どおり急ぐんですね。だれが急がせるのか、なぜ急がなければならないのかということは、どこにも説明してありませんが。

要するに、万世一系という国体信仰、日本の国体についての信仰がありますので、まあ、半日も一日も延ばしますと万世一系にならないわけですね。ですから、そのためにできるだけ間を置かないように即位すると、こういうことだろうと思うんです。しかし、儀式ですから、やはり十分とか二十分とかかるわけです。そこの間を埋めるために法律の文章で「ただちに」と書いてあるわけです。ですから、ただちにと書いてあるから皇位はただちに継承されたと、あとで解釈をつけると、ま、こういうふうなことではないかと思うんですね。

で、そこのあたりを考えるときに、わたしは天皇制というものの本質がわかるような気がするんですね。天皇が亡くなってそのなき骸が、死骸がそこにある。その死骸のすぐそばで、同じ場所で新しい天皇の即位

がおこなわれる。死骸をそっちのけにしてということばは適当でないかもしれませんが、ま、そういった感じですね。

ですから、昔のXデーの新聞、明治時代、大正時代両方とも、ここに天皇崩御、新帝践祚、践祚というのはむかしのことばで即位、天皇崩御、新帝即位、これも大正天皇、天皇崩御、新帝即位、こういうかたちでいままでは出てきたんですね。こんどもこういうふうになるかどうか、たぶんなるでしょう。で、天皇制にとって大事なことは、亡くなった天皇のことではないんです。新しい天皇が即位するということの方が大切なんです。つまり、天皇制というのは、その存続することに意義があるんです。だから万世一系という名目をできるだけ実質的に実現しなくちゃならないということで、こういう新聞の字面にも表れているわけです。

で、その即位はごく簡単で、四つくらいの儀式ですけれども、最初の神器の受け渡しということで、これはごくわずかの政府の要人が参列します。そうして、それにつづいて元号が変わります。元号はすでに用意されておりまして、複数の元号のなかから一つを選んで決定するということになっていますが、決定はしていますけども内閣の方でそれを発表します。昔は天皇がそれを決めることになっておりました。そしてその元号も、ただちに元号を改める。現在の元号法には、「ただちに」ということばはなくて、皇位継承があった場合にかぎり元号を改めるということになっていますが、昔の登極令という皇室令ですけれども、そのなかには、「天皇践祚ノ後八、直ニ元号ヲ改ム」ということばが入っておりました。ですから、とにかく一時間か二時間あたりには閣議が開かれまして、元号が決定する。そして、その日のもし午前中それがおこなわれますならば、その日の夕刊からもう昭和という年号は使われない、どこの役所でももう昭和という元号は使われない、ということになるわけです。

で、改元ということは、たぶんその時がきてみないと、わたしたちには十分にイメージできないのではないかと思うのですが、要するに、改元ということは昭和が終わるということなんです。昭和が終わるということはどういうことでしょうか。昭和がおわって、仮に光文というような、これは昭和の一つの候補の元号だったらしいんですが、仮にそういう新しい元号になりますと、一時間以内に必ず光文元年生まれの第一号が誕生するわけです。そうしますと、昭和生まれとい

うのは、もう、いまわたしたちが大正生まれだとか、明治生まれだとかいうことばで受け取っている感覚と同じようになるわけ。昭和二ケタ生まれなんていって若い気でおりましても、もう老けてくるんですね。改元というのはものすごいことだと思います。昭和と名のつくものが全部古くなってくる。それでまあ、わたしは大正生まれで、みなさん方よりも古めかしいわけですが、Xデーがくると皆さん方も、その仲間入りをされる、ということになります。

そして、一つ心配なことは、日本国憲法、これは必ず「昭和憲法」と呼ばれるようになります。そして、いまわたしたちが明治憲法といっていることばのなかにふくめているような感じが、「昭和憲法」のなかにふくめられて、昭和憲法改正というようなことが、なんとなくみんなの賛同を獲得していくようなこともありうるのではないでしょうか。そしてもう一つ、確実に終わることばの一つは、「戦後」。「もう戦後ではない」ということが池田首相のあたりから言われてきたんですが、こんどこそいろんな意味で、戦後は確実に終わります。

これは、わたしたちの運動にとってどういうことになるのかということは、よく考えて戦略を組まないとならないことだと思います。改元とは、こういうことであったのか、というふうに気がつくんじゃないかと思います。

弔旗掲揚など

それから、その日のうちにたぶん、政府から通達が出まして、弔旗掲揚、弔旗というのは、「日の丸」に黒い布をつけて、「日の丸」の玉も黒く包んでですね、そういうかたちにして掲げる。これは、直接には、内閣から各省庁あてに、つまり直々に政府の機関に対して要望が出ます。これは、このまえの高松宮の時の通達のコピーですが、こういったかたちでですね、弔旗の図面までつけて各省庁に回されてきます。そして、この弔旗を掲揚するようにという、弔旗掲揚に対する要望ですけれども、いちばん最後のところにですね、同じようなことを、各公署、会社、学校および一般に対しても周知方を要望すること」と、こういう文章になっています。命令調ではありませんけども、周知させるように要望しますと、内閣官房長官から通達が出てくるわけです。これは柔らかな命令です。ですから、各会社、学校、町内会、そういうふう

なところに対しても同じような圧力が及んでくるだろうと思います。

そうしますと、弔旗を掲揚するかしないかというのは、各省庁においてはこれは自ずから強制力がともなうわけですけども、それ以外については個人の自由ですね。人の死を悲しむかどうかということは、国民一人ひとりの自由と自由の判断にまかされているはずです。それはだれも強制できない。それが現代の憲法の基本的人権の理解だと思います。そういうことに対して、天皇の死を哀悼するために弔旗を掲揚するこを要望する、という通達が出てきます。掲揚する人と掲揚しない人、掲揚する団体と掲揚しない団体、一目でわかるわけです。で、掲揚しない人に対してすぐ罰則が働くかどうか、それはおそらくないと思います。けれども、だれが天皇制に対して心よくない感情をもっているかどうかということは、弔旗掲揚の通達一本ですぐにわかるわけです。天皇制に反対する人口何％、すぐ出ると思いますね。そういう働きをするのがXデーなんです。その一つが弔旗掲揚です。そして、それが昔ですと、それはすぐ、弔旗を掲揚しない人は非国民というレッテルをはられたわけですけども、こんどは、そんなことはわたしたちは許さない、というよりは、非国民の数を増やした方がいいと思っているんですが、ま、そういうことで、弔旗掲揚。それにつづいて、昔の例ですと、喪章をつけること、そういうのが通達されます。

そして、この喪の期間は一年間と申しましたけども、最初の五十日を第一期、次の五十日を第二期、残りの日数を第三期としまして、第一期には特に厳重な要望がされました。特に婦人の人の服装につきまして、もう全部黒ずくめです。帽子、それから帽子の飾り、それからベール、肩掛け、傘、靴、手袋、足袋も

昭和62年2月5日
事務次官等会議申合せ

政府は、昭和62年2月16日に、宮内庁の意を体するとの、次の上申を閣議了承した。

1　各省庁においては、可能な限協力されたい。
なお、可能範囲については、天皇元帥陛下一行に準拠し、弔旗は半旗をもって掲げ、期間の長期に亘れば半旗とするが、可能として平常閣議の慣行のあるときは、それに従ってもよいこと。

2　各省庁は、前項と同様の方法により国旗の掲揚を実施するよう各公署等に対し、協力を要請すること。

大臣官房長官殿
内閣官房長官
内閣官房長官殿
大臣官房長官殿
内閣官房長官殿
大臣官房長官殿
内閣官房長官殿
大臣官房長官殿

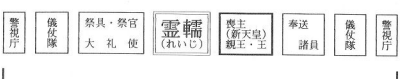
全部、最初の五十日間は黒です。持っていない人はみんな買わなきゃならない。第二期は灰色。こんどは灰色をもっていない人は、また灰色を買いそろえなきゃならない。こういうふうなことがこれまではあったわけです。だから、Xデーに白足袋を履く、みんなで白足袋を履くというのも一つの運動ではないかと思うんですけど。え、まあ、そんなことがありまして、それにつづいて哀悼式、天皇の死を悼むための式が政府関係の機関でおこなわれます。これは学校でもおこなわれたわけであります。遥拝式とも呼んでおりました。そして、そういうことによって、天皇制に対する忠誠をすすんで表わす人とすすんで表わしたくない人とは、同じように選別されていく。ですから、Xデーというのは、天皇制についての忠誠、忠誠を誓う、どの程度の忠誠心を持っているかということを試験をして、そしてその結果で選り分けて、そしてどうしても言うことをきかない者は異分子扱い、非国民扱いで排除していく、というふうなことにつながっていったわけであります。

それと同時に、ここに、二番のところに書いておきました「歌舞音曲の停止」ということばがありますが、これは、この天皇の死を悼むためににぎやかな音楽あるいは行事、そういうふうなものは遠慮しましょうというふうなことが、昔から一つの実績になっておりまして、「歌舞音曲の停止」ということばはそういう意味の熟語であります。このことばは、たぶんこんども、「歌舞音曲」ということるまでは必ず使われると思います。一九六七年の吉田首相の国葬の時も、「歌舞音曲をともなう行事は差し控えること」というのがありました。弔旗掲揚、黙禱、それからXデーがきたら半ドンにしてよろしいということと同時に、歌舞音曲をともなう行事、おめでたい行事は差し控えることを要望する、こういうかたちで通達されるわけであります。もちろん、その期間は限られておりまして、これまでですと、天皇の亡くなった日と、それから次から五日間、それと葬式の日一日、合計七日間、こういうことになっておりました。それがXデーがきました直後の動きですね。

大喪とデモンストレーション

それから、三番めに書いておきましたことは、このXデーが進みますときに天皇の葬儀がいろいろとおこなわれるわけですが、一年間二十九種類、そして大正

葬　列



天皇の場合ですと、十二月二十五日に亡くなりまして、二月の七日が葬儀の日でありました。四十五日めの日の葬儀は、やはり大嘗祭と同じように、夜おこなわれます。九時半から新宿御苑でおこなわれました。

で、ここに書いてある葬列というのは、その天皇の霊柩車を亡くなった場所から葬儀場に運ぶときの行列ですね。これが天皇制の大デモンストレーション、葬儀でも即位式でも、そういう機会をとらえて皇制の宣伝をするわけですね。大プロパガンダであります。これは大正天皇の場合の葬列でありますが、真ん中の二重になっているところが霊轜（れいじ）という天皇の霊柩車であります。霊柩を乗せた車ですね。それから、そのまえの方とうしろの方に儀仗隊というのがありますが、これは陸海軍の儀仗兵が二三千人、そこに隊列を組んで進むわけであります。その前後には、天皇に関係の深い人たち、特に霊轜のうしろには喪主、喪主は皇太子がなります。次の天皇が喪主について葬儀がおこなわれます。そういう人があとをくっついて歩くわけです。

この葬列が、全部で全長五、八六〇メートル、約六千メートルですね。六千メートルの行列が六千人の人たちに従われて新宿御苑まで進みます。その距離は六キロメートル、二時間半かかって、百五十万人から三百万人くらいの人が沿道でこの葬列を見送ったと記録に残っております。六キロを二時間半かけて進むためと、これも記録に残っているんですが、一分間八十三歩、五十メートルということですね。わたしが計算してみましたら、それだと二時間になるんですけど、前後いろいろ時間がかかって二時間半になるのだと思いますが、そういうふうに、まあ、ゆっくりゆっくり、

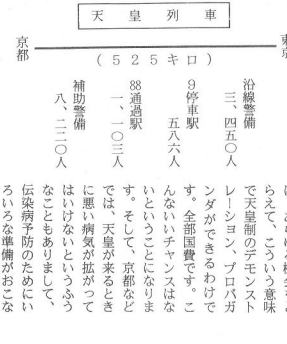
できるだけ多くの観客に時間をかけて見てもらうということがねらいであります。天皇制というものがいかに偉大であるか、ピラミッドみたいなものですね。国民をおそれさせる、そういう威力を演出するのが葬列であります。特に、天皇の霊柩車を乗せるところの車は、これまでは牛がひっぱりました。そして、その車輪のところに特別な仕組みをこしらえまして、七種類の哀音、哀しい音が出るようにして、車までも悲しみながら天皇の棺を送っていくというようなからくりがつくり出されました。これが天皇制のからくりであります。

葬儀は、午後九時半からおこなわれてオールナイト、翌朝の午前六時に埋葬式がおこなわれました。そして、午後十一時は、総理大臣が全国民を代表して、天皇に最後のお別れの遥拝をします。その時に、全国民が、午後十一時を期して新宿御苑の方をむかって遥拝をする。午前六時には、こんどは埋葬するときに、全国民が多摩陵の方へむかって遥拝するということを要求されたんです。文字どおり要求されました。これは一つの典型的な例だと思います。

それから、その下の方に書いておきましたのは、これは即位大礼の方ですが、即位大礼は、これまでは京都でおこなわれました。登極令に大嘗祭は京都でおこなうというふうに決めたんですね。明治天皇は東京でおこなったんです。それは、東京を新しい都にするための一つのデモンストレーションで、これまでの慣例をやぶって東京でやりました。京都の人が非常に反発しましたので、それをなだめる意味もあって、次から京都で大嘗祭をおこなう。大正天皇の時は、京都でおこなわれました。その時に天皇と皇后が三種の神器の鏡を持って京都に向かいます。鏡を持って天皇が移動するというのは、即位大礼の時だけです。天皇になるためには、三種の神器が必要なのでありますから、そういうことになりますね。そして、その東京と京都の間が、キロ数で五二五キロ、この間をどのくらいの人たちが警備をしたか、どのくらいの警官が警備をしたかといいますと、記録に残っている数をここに書いておきましたが、沿線の警備三、四五〇名、それから東京と京都の間で天皇の列車がストップする停車する駅が九つあったそうですが、その一つひとつの駅に警備の人が合計五八六名、それから八十八の駅は通過しましたけども、その通過駅の警備員は一、一〇三人、それでも足りなくて、在郷軍人などが青年団とかそういうふうな人たちをかりだして八、二二〇人の人たち

が、この天皇列車を警備したといわれております。合計一三、三〇〇人くらいになります。これも、一つの例ですね。

天皇が移動する時には、大名行列どころではない天皇行列が現出する。それが天皇制の国民に対する一つの教育であり、示威―デモンストレーションですね。で、大葬と大礼の時期は、あらゆる機会をとらえて、こういう意味で天皇制のデモンストレーション、プロパガンダができるわけです。全部国費です。こんないいチャンスはないということになります。そして、京都などでは、天皇が来るときに悪い病気が拡がってはいけないというふうなこともありまして、伝染病予防のためにいろいろな準備がおこな



われました。そのなかの一つにベスト、ねずみの媒介によって拡がるベストに対する予防のために、京都市内の各家庭でねずみを捕まえて、そのねずみを買い上げたんですね。一匹一銭、あまりにたくさん集まりましたので、そのなかの二十万匹だけをベスト菌があるかないかを検査をしたというふうなことも記録に残っております。膨大な元費ですね。一事が万事、そういうことであります。

一九二八（昭和三）年という年

それから、四番めのところは、そういう大葬と大礼、大葬は大正十五年、昭和元年、大礼は昭和二年という年におこなわれたわけですが、大正の場合は、十二月二十五日までですから、あとの一週間が昭和元年なんですね。で、その正月になりますと昭和二年になるわけです。昭和二年一年間が喪ですから、即位大礼はその次の昭和三年ということになるわけですね。元号ってのは、そんなに面倒くさいものでありません。それで、一九二八年、昭和三年、即位大礼で全国民が祝賀気分におどったその年はどういう年であった

か。これは、わたしたちが昭和をおくるときに、いわば昭和の葬送行進曲をわれわれ一人ひとりがかなでるわけですが、その時に、一体昭和という時代はどういう時代であったのかということをいやおうなしに総括させられると思います。させられるというよりは、テレビなんかをみてたら天皇なんか都合のいいような昭和史ができるだろうと思いますので、よほどわたしたちが厳密に昭和史というものを自分自身で総括しておかないといけないと思います。

一九二八年大礼のあった年、祝賀気分にあふれたその年を境にして、日本は、その前は大正デモクラシーの時期ですね。そして二八年以降は、ここに書いてあるのを見ればすぐにわかりますように、三一年から始まる十五年戦争、その準備の期間をふくめますと、ちょうど一九二八年が境になって、大正デモクラシーから天皇制ファシズムの時代へ移行していく分水嶺のような時期が一九二八年でありました。これも別に意図的にそういうふうに仕組んだということではないと思いますし、こんど同じような仕組みになるということはおそらくいえないと思いますけれども、一つこれは過去の歴史の勉強として、こういうことを心得ておくということは必要だと思います。

ここに書いてありますように、一九二八年は、まず年明けから第一回の普通選挙がおこなわれました。そして、八名当選いたしました。その中のいちばん最左派の労農党が十九万票獲得して二名議員を出しました。これはその、権力側にとりましては、非常に戦慄するような、一つの時代の兆候としてうけとられたわけであります。そして、そのことと、その年の秋の即位大礼ということを考えまして、三月の十五日にいわゆる三・一五事件という共産党員、その支持者、全国一斉に千六百人が逮捕されました。これが一九二八年のはじまりのできごとであります。そして、労働運動はそれを機会にだんだん右傾化していく、こういう時期になってまいります。そして、年表をみてみますと、その年におこなわれたこととしては、特高警察の整備、特高警察は一九一五年ころから始められたんですが、まだ全県に設置されておりませんでした。その全県設置をめざして強化・整備が始まります。それから、治安維持法というのが「改正」されまして、ま、改悪ですね。改悪されまして、勅令によって死刑が追加されるというふうになこともあります。

そして、六月には張作霖という、これは満州軍閥の

リーダーですが、日本軍は彼を使って「満蒙独立」を図ろうとしたのですが、思うとおりにならないので、彼が乗っていた列車もろとも爆破して殺しました。この張作霖爆殺事件が起こったのが、一九二八年の六月四日。それから三一年の「満州事変」、翌年の「満州国」建設となりました。このことが世界中の世論を刺戦して、一九三三年には国際連盟が対日勧告案を四十二対一で採択し、日本は国際連盟を脱退します。このあたりから、日本は世界の孤児となる運命を選びとっていくことになります。

一方、一九二九年から始まった世界大恐慌によって日本経済も深刻な打撃を受け、軍部のテロが横行するようになり、三六年の二・二六事件を、で翌年は、日中戦争に突入することになります。そして国民精神総動員が叫ばれ、国家総動員法が制定されて、文字どおり戦争体制が完成します。そして一九四〇年という年には、日独伊三国同盟が結ばれまして、日本は世界を相手に戦うことになります。もうのっぴきならない。そしてその年に大政翼賛会ができまして、政党政治がここで消滅します。そしてそれと同時に、大日本産業報国会というのができまして、労働組合が消滅します。これは、現代の労働界の兆候を考えますと、非常に恐ろしい一つの兆しのようなものが感じられるわけですが、大日本産業報国会が一九四〇年に結成されました。そして、翌年、太平洋戦争に突入するわけです。その次の四二年に、大日本言論報国会、日本文学報国会、もう、なんでもかんでもみんな報国ということをうけて、一致団結するわけですね。国家に対する批判、戦争に対する批判をする人は一人もいなくなるというような状況がつくりだされていったわけです。

こういう状況のなかで即位大礼がおこなわれたということを、わたしたちはもう一度勉強しなおして、それが現代の状況と似ていないかどうか、もし似ていとすれば何かそこに歴史的な法則のようなものが働いているのかどうかというふうなことを、やはりわれわれの責任があるのではないかと思います。

天皇美談と「国体護持」

で、その次に考えたいことは、Xデーをどう迎えるかという、わたしたちの学習にかかわることですが、Xデーはいま申しましたような権力側にとりまして

は、天皇の葬儀にしろ、天皇の即位にしろ、全部国民を動員し、国民を弾圧するための絶好のチャンスですね。天皇を盾にすることができますから、最高の過剰警備ができるわけです。こういうことで、もっぱらそういうふうなことを、わたしたちとしては警戒しておかなくてはならないと思うんですが、もう一つ大切なことは、どういう思想をもってこういう季節と闘うのかということが、今後の長い間の闘いのために、どうしてもそういう面をわたしたちが考えておかねばならない、勉強しなければならないことだと思います。

そのXデーの問題点の一つは、なんといっても戦争責任の問題であります。この戦争責任という問題は、日本人にとりまして非常に弱い点ですね。この最近、自民党の三百議席にあぐらをかいた暴言、失言が相次いでおりますけれども、渡辺美智雄が言ったことばの中に「中国の山西省あたりには、まだ穴を掘って穴居人のような生活をしている人が何人いるかわからない」というようなことを言って、すぐに取り消しました。それから、藤尾文部大臣が「日韓併合、あれは韓国にも責任があるではないか」と言って辞めさせられましたね。中曽根首相は、知識水準、アメリカの知識水準について、「プエルトリコとかメキシカンとかいろいろなのがあって、全体としては日本の方がはるかに高い」と言って失言したんですけども、自分で自分を辞めさせることはしませんでした。それから、ごく最近は奥野国土庁長官、歴史認識が非常に甘い。白人が侵略していったということを理由にしてですね、日本が侵略したことを隠そうとしている。だいたい白人の侵略を真似て日本がアジアで侵略国家になったんですから、白人が侵略したことが日本の侵略の帳消しにならないはずなんですけれども、あの時代の人の責任感覚というのはその程度だと思うんですね。要するに、日本がやったことを外から見ることができない、閉鎖国家の民なんですね。われわれもそういう弱さは共通して持っていると思います。内側から自分の国のことをなかなか厳しく見られない、外から見るとすぐわかることが、なかなかわからない。どうしてあんなことがわからないのか、といわれるような点がたくさんあるわけで、彼らはそれを代表して自分の地位を利用して堂々と暴言をしているわけですが、これは彼らだけを責めるわけにはいかない面もあるんじゃないかと思います。

で、Xデーがきまして、そういうことに関連しましていちばん心配なことの一つは、天皇美談であります。これは、その日のテレビ、第一日め、第二日め、第三日め、これは確実にもう番組が編成されておりまして、もう出番を待っている。出番を待っている間にもう十年近くたちまして、だいぶ古くなっているんじゃないかと思うんですが、そういう番組の中で必ず出てくるテーマですね。天皇制賛成者でなければそのあたりの座談会には出ませんので、天皇の責任を追及するというようなことは、おそらく一言も出ないだろうと思います。そして、天皇美談のなかにはいろいろなテーマがありますけれど、いちばん確実なことは、敗戦の年の九月の二十七日、天皇がマッカーサーと会見したときに、「自分の身はどうなってもいいから国民を救ってほしい」、こう言ったということがもとになりまして、天皇の「聖断」によって終戦ということができた、戦いを終わることができた、これによって国民が救われたんだ、こういう語りかたであります。

この事実を、その前後の歴史をよく学んで、そうでないということを反駁できなければならないと思うんです。テレビで放映されたときにですね、どうもおかしいというぐらいでは、相手の、違った考えをもつ人を説得できないと思います。そのためには、はっきりと歴史を勉強しておかなければならないわけですね。

皇太子の教育をしましたバイニング夫人が、日本にいる間に自分の日記をつけておりまして、その日記がいまアメリカのペンシルバニア州のある図書館に収めてあるんですが、そのなかにもマッカーサーとの会見のことが出ておりまして、そこに立ち合ったわけではないと思いますけども、天皇がマッカーサーに対してこう言ったということが書いてあります。この日記は、バイニング夫人が生きている間は公開されてはならないと約束されていたものらしいんですけど、どういうわけかそれが公表されまして、去年の十月三日の東京新聞に出ました。そのことばは、天皇の言ったことばとして「私をどうしようともかまわない、私はそれをうけいれる、絞首刑にされてもかまわない、こうなっている。本当に天皇がそう言ったのか、絞首刑というのは、もちろん日本語ですが、"You may hang me." と言ったとバイニング夫人は書いている。も思います。そこで、わたしの知り合いの人がバイニング夫人に直接手紙を出しまして、日本の新聞にこういうことが載っているけども、あなたに無断で公表さ

す。これは、確実にもう番組が編成されておりまして、もう出番を待っている。出番を待っている間にもう十年近くたちまして、だいぶ古くなっているんじゃないかと思うんですが、そういう番組の中で必ず出てくるテーマですね。天皇制賛成者でなければそのあたりの座談会には出ませんので、天皇の責任を追及するというようなことは、おそらく一言も出ないだろうと思います。そして、天皇美談のなかにはいろいろなテーマがありますけれど、いちばん確実なことは、敗戦の年の九月の二十七日、天皇がマッカーサーと会見したときに、「自分の身はどうなってもいいから国民を救ってほしい」、こう言ったということがもとになりまして、天皇の「聖断」によって終戦ということができた、戦いを終わることができた、これによって国民が救われたんだ、こういう語りかたであります。

この事実を、その前後の歴史をよく学んで、そうでないということを反駁できなければならないと思うんです。テレビで放映されたときにですね、どうもおかしいというぐらいでは、相手の、違った考えをもつ人を説得できないと思います。そのためには、はっき

れたのではないかという問い合わせをしましたら、バイニング夫人から返事が来まして、「自分は、存命中は、生きている間はこれを公表してはならない、という約束で図書館に預けたので、そういうことがもしあったとしたならば、それはわたしの納得できないことだ」というような返事をもらいまして、なにかトラブルがあったということを彼女は認めているわけです。ま、そういうことまでやって、いわゆるXデー情報というのがすでに始まっているわけですね。新聞をとおして始まっているわけです。

で、天皇がはたしてそう言ったかどうかということを確かめる一つの資料ですけども、木戸日記というのがありますね。杉山メモだとか、木戸日記というのが、あの戦中の交渉ですから、非常に困難をきわめた作業だったと思うんですけど、そのために時間がかかるわけです。で、八月の六日の広島、八日のソ連参戦、これは八日の真夜中から九日にかけて、そして九日の長崎の原爆がありまして、その日の午後十一時半から宮中の地下壕で御前会議が十日の午前二時半まで開かれました。そしてそこで、意見が真っ二つに分かれて、徹底抗戦するという側と無条件降伏するという側が対立したために、鈴木貫太郎首相がですね、天皇の決断をお願いするというかたちになったらしいんです。で、天皇が止めるというふうに決断した、ま、こういうことですけども、その時になぜ天皇が決断したかということが、この天皇が国民を救ったかどうかという、美談といわれるものの真相に迫ることができる一つの点ではないかと思うんですね。

わたしは、天皇がもし、これ以上国民を犠牲にし、国土を焦土に化するという、そういうことが戦いを止める原因であるならば、沖縄戦の段階でですね、そういうことは当然あってよろしいわけです。で、ポツダム宣言が出れば、それを一つのチャンスにできたうかと。そのことを天皇に伝えましたら、天皇がこう言ったわけですね。「もう一度戦果をあげてからでないと、なかなか話が難しいのではないか」。つまり、アメリカ軍をうんと叩いてですね、その戦果のうえにたって交渉すればよい結果が得られるのではないか、こう言ったというんです。これは木戸幸一日記に出てくるわけですから、まさしく天皇はこう言ったと思いますね。だから、現在のきょうの新聞に載っているような、八十七歳の天皇のイメージからは絶対に浮かばないことばだということを、忘れてはならないと思います。だから、沖縄戦というのは、天皇の考え方によれば、もう一度戦果をあげるための国体護持の捨て石作戦であった、時間引き延ばしの作戦であったということは、多くの人が認めていることであります。

そして、その年の七月二十六日にポツダム宣言が発表されました。無条件降伏を要求するポツダム宣言。一九四五年の七月二十六日にもしこの戦争をここでやめるという天皇の決断があったならば、八月六日の広島、八日のソ連参戦、九日の長崎原爆、これは全部なかった、なくて済んだことなんです。ところが七月二十六日のポツダム宣言が発表されまして、日本政府はこれを受理しない、拒否するという声明を出して、一

方では、なんとかしてこの国体を残して降伏をするそういう道はないかということをさぐっていたんですね。それは、あの戦中の交渉ですから、非常に困難をきわめた作業だったと思うんですけど、そのために時間がかかるわけです。で、八月の六日の広島、八日のソ連参戦、これは八日の真夜中から九日にかけて、そして九日の長崎の原爆がありまして、その日の午後十一時半から宮中の地下壕で御前会議が十日の午前二時半まで開かれました。そしてそこで、意見が真っ二つに分かれて、徹底抗戦するという側と無条件降伏するという側が対立したために、鈴木貫太郎首相がですね、天皇の決断をお願いするというかたちになったらしいんです。で、天皇が止めるというふうに決断した、ま、こういうことですけども、その時になぜ天皇が決断したかということが、この天皇が国民を救ったかどうかという、美談といわれるものの真相に迫ることができる一つの点ではないかと思うんですね。

わたしは、天皇がもし、これ以上国民を犠牲にし、国土を焦土に化するという、そういうことが戦いを止める原因であるならば、沖縄戦の段階でですね、そういうことは当然あってよろしいわけです。で、ポツダム宣言が出れば、それを一つのチャンスにできたわけですけども、それをなぜしなかったのか。ということは、結局、国体護持ということが、その当時のリーダーたちの考えでもあり、天皇自身の考えでもあったと思う。国体を護持するというのは、要するに、天皇制が残るということなんですね。皇室が残り、天皇が残り、権力階級が残り、そして天皇を中心とした国のあり方そういうものが残る。それを、それについての〇Kをとるということが彼らの最大の条件であったのです。で、それじゃなぜ八月十日の午前二時半にそういう決断ができたかというのは、やはりその前の日のソ連参戦というのが決定的な引き金になったと思う。ソ連が参戦をして、ソ連が戦勝国の側について、ソ連が日本を占領する可能性を持つ国になった場合にどうなりますか。天皇制が残るかどうかということは、もう議論する余地もないことです。みなさん、そう思わないでしょうか。天産革命のもとでは、天皇制は絶対に残りえない。そこで、天皇は決断をした。そして、その後憲法制定その他になるんですが、マッカーサーの希望もあり、とうとう天皇制を残したままの日本国憲法、象徴天皇制になった。

そして、その最後の御前会議で、本当の最後の御前

会議は十四日ですが、その八月九日から十日朝にかけての御前会議に出席していた人が、ただ一人生き残っている。それが、朝日新聞の『戦争』というシリーズに投書しております保科善四郎という、現在九十五歳、元海軍中将ですけども、この御前会議に出席したときは海軍軍務局長でありました。そして彼は、自分の経験した御前会議の様子を残しておきたいという投書したわけですが、「もう、あの時の御前会議に出席していた人間は、天皇と私だけだ」、こう書きけれども、その時に天皇がどう言ったかということは、こういうふうに書きとめてあります。これは、その時にいた人のことばとして聞いていただきたいのですが、天皇はこういった。意見がわかれて、天皇に聖断をあおいだ時に、鈴木首相は一長時間にわたり審議しましたが、ここに意見の一致をみることができないのは誠に遺憾であります。天皇のご聖断をあおぐしかありません」と起立して、陛下の前に進んだ。陛下はこう言われた。「皇室と国民と国土が残っておれば、国家生存の基盤が残る。これ以上望みなき戦争を継続するのは、元も子もなくなるおそれが多い」。これが天皇のことばとして伝えられて、「皇室と国土と国民」、国家が生存するために皇室が必要かどうか、ということは天皇制の最大の問題です。ですから、天皇にとっては国体護持というのは絶対の条件だったのです。天皇の天職だった。天皇の使命だったんです。それでポツダム宣言をうける時の条件にですね、十日の御前会議がありまして、結論としてアメリカ側に伝えた政府のことばは、「天皇の国家統治の大権を変更するという要求を含んでいないという了解のもとにポツダム宣言を受諾する」、こういうことを伝えた。それに対するOKの感触があったのち、十四日の夜の御前会議で最後の決断がなされた。こういう経過です。まあ、これだけの限られた情報ですけども、これだけのことを考えただけでも、国民を救うために戦争を止めたかどうか。自分がどうなってもいい、自分がどうなってもいいというよりは、国体はどうなってもいいという決断さえあれば、もっともっと早くこの戦争を回避することができただろうと思うわけです。

で、「国体護持」ということばは、今ではあまり恐ろしい響きは伝わってこないと思いますが、国民体育大会ではないんですね。国体といったら、本当に、戦時中は泣く子も黙るような、国体を批判するとか簡単に抹殺された、そういうことばであります。そこで、最後の敗戦の時の詔勅に「朕はここに国体を護持し得て、忠良なる爾臣民の赤誠に信倚し」云々、ということばになっている、あのことばの意味がよくわかると思うんです。「ここに国体を護持し得て」。ですから、戦後民主主義も日本国憲法も、そういう大きなマイナスをかかえていた、かかえているということを絶対に忘れることはできないと思います。

そしてそういうことがありまして、この国体護持が天皇にとっての使命であるということを申しあげましたが、それはわたしの勝手な言い方ではなくて、天皇が即位大礼で即位をする時に勅語を出します。明治の場合も、大正の場合も、昭和の場合も出ておりますが、その即位の勅語のなかに、この国を平和に治めていくことが自分の天職であるから国民の協力を求めるという意味の勅語があります。そこで天職ということばが使われておりまして、これは天皇が代々に就くことを国民にむかって語りかけることばのなかにあるわけです。祖宗から伝えられた、つまり天照大神からずっと二四代伝わってきた、この重い重い責任を果たすことができるために国民の協力を求める、これが国体護持ということばになるわけです。

ですから、どのような戦争の犠牲があっても、この国体を護持するということができるならば、その戦争は無駄ではない、広島・長崎やむを得ないという天皇の気持ち、わたしは嘘ではないと思うのね、ですから、一九七五年に天皇がアメリカ訪問する時に、記者会見というのがありまして、その時に天皇の戦争責任についての質問を記者がいたしました。これはめったにない天皇の記者会見のことばです。まず、広島の原爆について訊きましたら、「この原子爆弾が落とされたということは、遺憾には思っておりますけども、こういう戦争のことでありますから、どうも広島市民に対しては気の毒であるが、やむを得ないと思っております」。このことばで広島市民のどのくらいの人が天皇に対して激怒したかわからない、天皇の人格というものを初めて知った、こういうふうなことばであります。そしてさらに、戦争責任について天皇はどうお考えですか、とずばり訊かれた時に、天皇はこう答えました。「そういう言葉のアヤについては、わたしはそういう文学方面はあまり研究もしていないのでよくわかりませんから、そういう問題についてはお答え出来かねます」。こう答えました。

きょうの新聞、みなさんご覧になったでしょうが、こういうふうに書いてあります。天皇誕生日をまえに

記者が会見をしまして、日本が戦争への道をつき進んだということを、四十年たってその最大の原因はなんだったとお考えになりますかと訊きましたら、天皇がこう答えました。「そのことは、人物の批判とか、そういうものが加わることになりますので、いまここで述べることは、避けたいと思います」。「人物の批判」、それは大変。十五年戦争の責任を一々細かにあげつらったら、どこから戦争が始まったか、というようなことは歴史家でも議論が分かれるでしょう。どこからもう引き返しがつかなくなったかということは、細かに言えばいろんな意見が分かれると思います。だいたい、一九三七年の日中戦争あたりですね、あのあたりが境目だったと思うんですけど、そういうことについては、もちろん天皇もなんだかだと言えない。誰それの名前をあげると、その人に全部責任をかぶせることになる。こういうことなんですが、それはそれとしましても、「人物の批判」のなかに自己批判というのが入らない、これが天皇発言のいちばん大きな特徴です。自分とまったく無関係に、これまでの昭和史が進んできたようなことばでしょ。

そしてもう一つ、天皇は過去をふりかえって、その印象としてこういうことを言いました。「なんと言っても、大戦のことが、十五年戦争をふくむ大戦のことが、いちばんいやな思い出であります」。みなさんは、あるいはきょう新聞をよんだ人は、このことばに疑問を持たないでしょうか？　毎日新聞には、こういう解説が付いています。この記者会見で、天皇はリハーサルをやった。打ち合せをやったわけ。その時には、「なんと言っても、大戦のことがいちばんつらい思い出であります」ということになっていたんです。だけども、天皇は本番の時に、「いちばんいやな思い出であります」、こう言った。おそらくあれね、本音ですね、出たんだと思います。で、「つらい思い出」と「いやな思い出」が、日本語としてどういうふうに違うかということは、日本語がわかる人はわかるんじゃないでしょうか。「つらい思い出」というのは、自分がそれに参加しているということなんです。参加しているからつらいんです。「いやな思い出」というのは、いちおう自分とは関係ないことにしてね、あるいは自分が不承不承それに巻き込まれた、だからいや、いやなんだ。そういうふうに解釈することはこじつけでしょうか。わたしは、こじつけではないと思います。だから、天皇はいつもですね、あれは軍部がやったとか、自分は憲法にしたがって行動したとか、自分には責任

が及んでこないような考え方をするんですね。わざわざそうしているんじゃなくて、自然に言ったらそういうふうになる、そういうんだと思います。

で、この、そういうふうなところから、天皇の戦争責任というのは、ただ一般的な戦争責任というのじゃなくて、天皇の戦争責任というのは、どうしても日本民族としてしっかりと考えつめていかねばならない。そして、わたしたちが戦争責任という場合の責任と、天皇が考える戦争責任というのは、まったく違うんだということですね。いま先ほど言いましたように、天皇にとっては、戦争をやっていく責任があるんです。戦争を遂行する責任なんです。戦争を遂行する責任というふうなことは、全然合わないんです。

ですから、先ほどの沖縄、天皇来沖―訪沖の時に、沖縄県で県民会議というのが作られまして、天皇訪沖に対してアンケートを募集して、それを新聞に出しました。そのなかにわたしの知人の一人ですけども、こういうアンケートを載せましたので、それを最後に申しあげたいと思います。「天皇を敬愛していた私の恩師が亡くなる少し前に、天皇陛下は罪ということがお分りにならない人だ、と心深く嘆いていたことを伝え聞いた。戦争を命令し、国民を召集して侵略戦争に突入させ、二千万以上のアジア諸国民を殺し、沖縄を血の島と化し、本土を焦土と化した最高責任者は天皇である。その罪は宇宙大である。然るに、天皇はまったく戦争責任をとっていない。」こういうことば、これは実に痛烈なことばではないでしょうか。

きょうは天皇誕生日ですが、わたしたちは、こういう天皇を象徴天皇としていま持っている、そういう国の一員なんです。わたしたちの戦争責任もまた、実に重大だということを、日本の外からアジアの人たちの側から見ることのできる人になりたいと思います。

これで終わります。

去る四月二十九日、戦闘的諸氏十二氏のよびかけによって「なくせ天皇制！　許すなXデー攻撃！」映画・講演集会が、多くの人々の参加のなかで実現された。そして日本キリスト教団靖国問題特別委員会の委員長である戸村政博氏が、「Xデーをめぐる天皇制問題」と題した講演をおこなった。

ここに掲載した「Xデーと天皇制」は、当日の戸村氏の講演に戸村氏自身が加筆・整理をおこなったものである。

開始されたXデー攻撃

天皇元首化―「記帳」、「自粛」を粉砕せよ

豊浦　作造

はじめに

九月十九日深夜天皇ヒロヒトは吐血し、二十日未明宮内庁はヒロヒトの「急変」を発表した。以降ブルジョアマスコミは大々的に「天皇重体」報道を開始し、政府は「政治日程の変更」、元号制定作業に着手し、日帝政治警察は反革命治安弾圧にのりだしている。

これ以降大々的に天皇Xデー攻撃が開始されている。天皇Xデー攻撃は、ヒロヒトの死―アキヒトの即位の二年余の過程を、〝一億総天皇漬け〟にしていくものである。この攻撃は、かつての「大正」―「昭和」への過程がそうであったように、「崩御」（天皇の死）以前に進められている。実際、九月二十日以降の過程は、天皇Xデー攻撃が戦争とファシズムへの跳躍台にほかならないことを示している。

こうしたXデー攻撃の開始に対し、革命軍は九・二六船橋西署道野辺派出所への爆破攻撃にたちあがった。反戦・全学連武装隊は、列島をゆるがす反天皇十月決起にたちあがった。

天皇Xデー攻撃との熾烈な攻防は開始された。

九月二十日、開始された天皇Xデー攻撃

九月二十日以降進行しているXデー攻撃の第一は、マスコミの大々的天皇報道である。ブルジョアマスコミは、アナウンサーが服装を喪服もどきの暗黒色系のスーツを着用して登場し、天皇ヒロヒトの「重体」に「全国民が憂えている」かのような報道を連日くり返している。また「服喪」―「歌舞音曲の禁止」の尖兵としていち早く番組変更した。

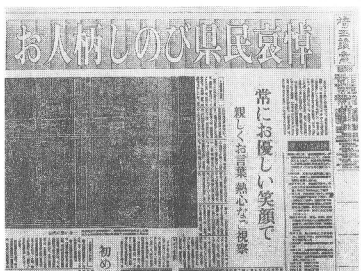
このブルジョアマスコミの天皇Xデー攻撃に果たす

尖兵的役割は徹底して粉砕されねばならない。かつて「大正」―「昭和」への過程でのマスコミは、天皇制支配の強化に積極的役割を果たした。それは、当時の帝国主義支配階級が、「近頃の新聞は、日本国家の聖書といってもよい。御大典を通じて国体の精華を現わしておる」（内大臣望月圭介）、「今回の御聖儀にあたりまして……新聞記者諸君・写真技師諸君の不眠不休の活動は……真に偉大なる国民読本としてこれを供せられたのであります」（大礼使長官近衛文麿）、と最大限の賛辞を贈っていることにも明らかである。

第二に、「見舞記帳」が、ファシズム大衆運動を尖兵として大規模な「国民運動」・臣民化の強制として形成されようとしてきたことである。はじめは宮内庁関連施設で開始されたものが、一挙に全国の自治体で実施され、記帳への動員が「国民運動」へとおし上げられようとしている。

この記帳運動は、天皇の戦争責任を「病にたおれた」ことをもって清算し、天皇を神格化し天皇（制）のもとへ全国民の屈服を強制していくものである。

この記帳に関して全国の自治体が何の根拠もなく「右へならえ」式に記帳所を設置したことは、地方自治体が天皇制支配の末端行政機構へと組み込まれ、また天皇を元首とする政治支配、天皇の神格化をおし進めるものである。この自治体による記帳所設置を全面



読売新聞の「Xデー予定稿」（埼玉県北版）

的に粉砕しなければならない。

第三には、列島をおおう「自粛」運動（強制）である。

数々の行事が「自粛」という形で中止となっている。これは「右へならえ」式の天皇制への忠誠の強要であり、さらにこれは政府・行政の連連・指導や右翼ファシストのどう喝によってなされているのだ。この「自粛」の進行こそ来たるXデー下の「服喪」の地均しであり徹底して粉砕し尽くさねばならない。

Xデー態勢を粉砕せよ

天皇制強化・天皇賛美キャンペーンを展開するブルジョア報道機関は、言論報国会の中枢＝NHKの七十二時間の服喪番組「Xデー番組編成表」をはじめXデー態勢に突入している（表参照）。言論報国会推進勢力＝読売新聞は、ヒロヒト追悼のXデー予定版 をつくっている（写真参照）。また「英文毎日」ではヒロヒトがすでに死んだものとして追悼の社説を掲載してしまった（写真参照）ことによって、編集長が解任されるという「不敬罪」処分が強行される。

以上のように水面上に浮上しただけでも、Xデー態勢＝天皇賛美キャンペーンにブルジョア報道機関が突入していることがわかる。これは言論報国会化の事先推進にほかならない。

Xデー態勢にはいっているのはそれだけにとどまらない。

各銀行にはXデー当日・翌日の服喪・自粛要項が全国銀行協会によって流されている。また証券業界ではXデー当日の株式市場閉鎖を決めている。映画館にも「自粛ガイドライン」が流されている。印刷業界でも年賀はがき、改元問題、あるいは用語をめぐって「ガイドライン」が流されている。また書店においてもXデー後天皇コーナーを設けること、そこからの反天皇書籍の排除が策動されている。

また教育現場においては、半旗強制、黙とう強制などがすすめられようとしている。名古屋の市立中学においては、「反動教師が生徒に『記帳しろ』などという許しがたい『天皇主義教育』までおこなっている。

また交通機関は、Xデー以降皇居前へむけて二十四時間フル運転する計画がねられている。「JR東日本」、営団地下鉄、都営地下鉄などこの準備がすめられている。とりわけ革マル副議長・松崎明は、天皇の赤子＝革マルとして忠臣ぶりを示すのはこの時とばかり、二十四時間フル運転・労働者への服喪強制に率先して協力しようとしているのだ。

NHKの「Xデー以後」用の番組編成案

	1日目	2日目	3日目
前0/5	朝時 臨時ニュース （現中継録音） 皇室関係 ニュース		
後6/1	ニュース 崩御未報、宮内庁中継 官房内閣、閣僚談話 大臣ミニ一代記など 「国葬会で弔辞？」 「総方選挙の影響」 歴代総理大臣書簡談会 —国下の思い出—	ニュース 各地の動き、演説 閣内の反響 各地の動き 追悼会（1） 「天皇陛下のお歌」（再） 「天皇陛下と生物学」（再）	ニュース 各地の動き、演説 閣内の反響 各地の動き 追悼会（2） —各界— 会内庁庭中継
11	天　気	天　気	天　気
後0/1	ニュース	ニュース	ニュース
6	ニュース（録音版） 官房官、閣僚、各地中継 閣僚談話 「天皇陛下とお歌」 「天皇陛下と生物学」 ネタ：オイ！ヒデ！ —天皇陛下も御年—	ニュース（録音版） 会内庁庭中継 各地の動き 「皇室人方文風」（再） N響追悼演奏 「新天皇時代に期下」（再）	ニュース（録音版） 会内庁庭中継 各地の反響 N響追悼演奏
	ニュース（ローカル版） 天気・おしらせ	ニュース（ローカル版） 天気・おしらせ	ニュース（ローカル版） 天気・おしらせ
後7/1	ニュース 「国葬大行天皇」 ドキュメント 「出血が止まらない」 追悼座談会 —天皇陛下をしのぶ—	ニュース 第1部・さようなら昭和 昭和への感慨（各界） —やみの地下ポート— 敗戦中継 ニュース 第2部・昭和回顧 昭和の映像 —歴史による回顧—	ニュース 「新天皇ご一家」 敗戦代表談 ニュース ポスト昭和を考える —激論集—
11	ニュース	ニュース	ニュース
前0/5	ニュース 「新天皇陛下」 （放送延期）	N響追悼演奏	N響追悼演奏
		ニュース	ニュース

※4日目～7日目はシリーズ「昭和40代」「番組にみる昭和」などの追悼番組を予定

(12) (B) Monday, September 25, 1989

EDITORIAL

A Nation Plunged Into Grief

The demise of His Majesty the Emperor has plunged the nation into profound grief.

We too feel the deepest sorrow, as we look back at this time on his reign.

On New Year's Day 1946, when hunger and devastation were Japan's face following its defeat, the Emperor addressed the nation. In his message, he spoke of, "You, the people" the land of "You, my subjects," which had been customary until then, thus heralding a new relationship with the nation.

He said, "We are constantly tied with you, the people, in the bond of mutual trust and respect, which derives not from a mere legend or myth." The Emperor personally renounced the myth of divinity.

At a subsequent court poetry party, the Emperor composed a

Xデー用社説予定稿を掲載した英文毎日

九月二十日午前〇時をもって開始された天皇Xデー攻撃のなかで、日帝支配階級は天皇を「元首」だとし、これをもって戦後憲法に表現された戦後的階級関係を打破しようとしている。元首化攻撃をもって天皇制攻撃の一大飛躍点とし、国家機構の再編強化をねらっているのだ。天皇Xデー攻撃こそ、戦争とファシ

ズムへの跳躍点であり、それを天皇・天皇制賛美キャンペーンをテコに天皇元首化をもってすすめようとしているのだ。

元首化の動きは、天皇Xデー攻撃の開始に対して、第二次大戦における日帝の〝敵国〟＝イギリスの大衆紙「サン」と「デイリー・スター」の両紙が、戦争中の日本軍によるイギリス兵捕虜への虐待などの責任者としてヒロヒトを弾劾したことから始まる（九月二十一日）。この両紙の報道に対して日帝外務省は、イギリス政府に抗議するという行動にでた（九月二十二、二十三日）。このとき外務省は天皇とヒロヒトを「ソブリン（元首）」としたのである。

また、天皇賛美キャンペーンのもとで、沖縄に対してすすめられている皇民化攻撃の先頭にたつ沖縄知事西銘は、「記帳所」設置への追及に対し、「国家の元首が病気になって、お見舞いするのがなぜ悪い」などと発言した。さらに「（天皇は）世襲制にもとづく特殊な身分」だとおし出し「天皇＝元首」だと強弁したのだ。

こうしたことに示されるように、天皇Xデー攻撃のただなかで、敵の攻撃のカナメは天皇の元首化に絞られてきたといってよい。行政機関の「記帳所」設置や「自粛」、都道府県議会の「快癒決議」なるものは、単に国民動員にとどまらず、天皇を元首として突出させるためのものとしてある。つまり、君主―臣民関係の確立にその眼目があるのだ。

日帝外務省がイギリス政府に対する抗議にあたって用いた「ソブリン」とは、単なる〝代表〟を意味するものではなく（憲法上の天皇の規定＝〝象徴〟《シンボル》は〝代表〟でもない）、〝主権者〟を意味する概念である。この「元首」をめぐっての国会答弁でも閣法制局は、「天皇が元首であるかどうかは定義いかんによる。内治、外治のすべてを通じ掌握しているということなら（天皇は）元首にあたらないが、国家における〝ヘッド（頭）の地位で、外交関係で国を代表するものと考えるならば、国事行為として外国の大公使を接受する天皇を元首と考えることもできる」と述べた。だが、問題の本質は言葉の言い換えにあるのではない。また外にむかってのものと内にむかっての性格が違うような内閣法制局の説明は、天皇元首化を隠蔽するためのものにすぎない。国家の外にむかっての行動が内にむかっての性格を規定するのはいうまでもない。

天皇元首化とは、日帝敗戦と米軍占領、そのもとで

反天皇デモを闘う在米中国系住民（10.17 ニューヨーク）

の階級攻防をとおして形成された戦後的階級関係―戦後憲法に表現されたもの―制度的にはは〝主権在民〟を打破し、これにおきかえるものとしての攻撃である。そして天皇のもとへの権力集中をもって、戦争とファシズムへの跳躍点としようとしているのだ。これを断じて許してはならない。

また徹底して対決し粉砕しなければならないのは、ヒロヒトの死以降の約二年にわたる一連の儀式＝践祚―喪儀―即位の神道の儀式が国家行事としておこなわれることである。とりわけ竹下政権はこれらの儀式のうち、〝三種の神器〟を継承するという「剣璽渡御ノ儀」あるいは「践祚後朝見ノ儀」を国事行為としておこなうとしている。「剣璽渡御ノ儀」とは、いわゆる〝三種の神器〟のうち、その剣「天叢雲剣（あめのむらくものつるぎ）」、そして璽「八坂瓊曲玉（やさかにのまがたま）」の二種を新天皇がひきつぐ儀式とされ、それが〝皇統連綿〟〝万世一系〟の神話を再生産するものとしてある。また「践祚後朝見ノ儀」とは新天皇が臣民に対し即位を告げる儀式である。

これらを国事行為としておこなうということは、神話にもとづき天皇が国民の上に君臨するということを制度化することである。これらの国事行為としての強

的統治機構のファッショ的再編がおしすすめられている。

また、さまざまな祭・イベントなどの「自粛」の名による相次ぐ強制の中止は、国家権力および天皇主義右翼の暴力的脅迫によっておこなわれている。これは人民の自主的諸活動を解体し、天皇の名のもとに国家的統治系統に系列化し秩序づけるものとしてある。またスポーツにおいてもしかりである。夏の高校野球における浩宮（ナルヒト）の始球式、ソウル・オリンピック日本選手団の皇太子アキヒトのもとでの結団式、大学野球日本一を決める神宮野球大会の中止等は、スポーツ活動のファッショ的系列化を策したものである。

こうした動向は、職場・地域末端まで展開されようとしている。「記帳」を町内会の祭の中止をめぐって、自殺者まで生みだしている（神奈川県平塚市）。「記帳」、「自粛」運動によって自警団や隣組などのファッショ組織の条件を育成しようとしているのだ。

職場においてもまたしかりである。とりわけ許しがたいのは自治体労働者に「記帳所」業務が強制され、すでに服喪の活動が労働者に強制されようとしていることである。また、各職場においても、さまざまな形で服喪強制の準備策動がおこなわれている。

全労働者階級人民は、いっさいの服喪強制を拒否し粉砕し、天皇元首化をうち砕け！

「非国民」狩りと天皇翼賛勢力化

天皇Xデー攻撃は、徹底した国民統合の攻撃であり、それは批判的な者に対して「まつろわぬ民」、「非国民」として排撃・解体・弾圧するものとして進行する。解放派への弾圧をはじめこの間の事態もそのように進行している。東京都議会では共産党の発言に対して「問責決議」を強行し、埼玉県議会では「議事録からの削除」を決議した。

批判者への排撃とともに、翼賛化の攻撃も進行している。社会党委員長土井の「快癒祈念」発言―「記帳」に示されるように、また神奈川県議会における与党社会党の「快癒決議」は、まさに社会党が「陛下の野党」に転落したことを意味する。日共への「問責決議」に賛成する公明・民社などはいわずもがなである。こうして一定の“抵抗”を示す日共以外の議会内野党は、天皇翼賛キャンペーンに完全にのみこまれてリア首相、アイルランド首相の来日延期を求めた。また、日中平和条約十年の諸行事もとりやめている。こうした形で、天皇の死の切迫を理由に日帝の外交関係を「自粛」することによって、憲法に規定された内閣―天皇関係を実際的にうち破り、天皇の神格化・元首化のテコとし、これによって“天皇の内閣、天皇の政府”をつくりあげようとしている。

また、各省庁による「自粛」運動および各都道府県知事の「記帳」や自治体の「記帳」業務、議会の「快癒決議」などをとおして、“天皇の官吏”、“天皇の議会”づくりがすすめられている。

また自衛隊も、「自粛」運動やXデー後の反革命活動の準備をとおして“天皇の軍隊”づくりがすすめられている。

すでに警察は、岐阜県警がミチコ警備を理由に川でおぼれている子供を“見殺し”にしたことに端的なように、また九月二十日以降の解放派に対する「不敬罪」弾圧をはじめとする反革命弾圧、および反天皇の声をあげる人民への職質―不当連行その他の弾圧によって、“天皇の官憲”として確立されようとしている。

こうして天皇の神格化・元首化をテコに軍事的官僚

行は、単に憲法の「政教分離」原則に違反しているということだけではなく、戦後憲法制度における“主権在民”と“象徴天皇制”の並存の矛盾、これの露呈である。したがって日帝支配階級は、この矛盾を右から突破することによって戦後憲法制度を実質的につくりかえることをめざしているのだ。

こうした即位儀式の一切を粉砕しつくさねばならない。

「記帳」、「自粛」運動による天皇元首化攻撃

現在おこなわれている「記帳」と「自粛」は、天皇神格化・元首化のための戦争である。「記帳」への国民動員をとおして元首としての天皇のもとに服する臣民をつくりだしていく運動である。

「自粛」は、まず首相竹下をはじめとする内閣の行動として展開された。もっとも重要なのは、対外活動における「自粛」である。外相宇野は、訪米―国連総会出席を中止した。これにより米帝首脳との会談、ニューヨークでのソ連外相との会談をキャンセルした。さらに、天皇の“病状悪化”を理由に、外務省はイタ

いる。まさしく〝大政翼賛会〟への道をひた走っているのだ。

とりわけ反革命革マルは、天皇の赤子化を満展開している。早稲田大において民間ファシストによる私設の記帳所設置を放置するばかりか、早大祭実行委員長・伊藤正なる革マル分子が「病状を気遣うのは当然」と言いはなっているのだ。何という革マルのヒロヒトへの忠誠ぶり、赤子ぶりか！　革マル副議長にして東鉄労委員長、松崎明もまた、ミチコ警備で子供を見殺しにした警官に対して「妃殿下をお守りになる」「崇高な任務が与えられている」自衛官や警官を非難するつもりはない」と言いはなっているのだ。

天皇主義ファシストは、〝平癒祈願〟の大煽動を組織し、人民全体を「自粛」にひきずりこもうとしている。解放派の列島を揺るがす決起のまえに、ファシストどもは「自粛」のそでの下で、白色テロにうって出ようとしている。現代社本社、関西支社などに笑止千万のナーバス電話を入れてきている。神奈川県大和市では日共の事務所に火炎ビンを投げ、朝日新聞水戸支局をふたたび襲撃。動労水戸のストライキに対して「反天皇は許さない」と叫んで突っこんできた。

解放派と戦闘的人民に対し襲撃を策す天皇主義右翼ファシストを撃滅せよ！

Xデー態勢を粉砕し、天皇制打倒・日帝国家権力打倒へ攻めのぼれ！

天皇Xデー攻撃といかに闘うか

われわれは、天皇Xデー攻撃といかに闘うのか。

天皇（制）とは、日帝の対外および対内行動を実現するために不可欠な国家権力の一構成要素である。したがって天皇闘争は、日帝国家権力打倒の闘いの不可欠の一環であり、プロレタリア国際主義の真価をかけた闘いであり、またプロレタリア革命によってのみ天皇（制）の打倒はなしうるのである。

天皇Xデー攻撃との闘いの方針は、まず第一に、この天皇Xデー攻撃が天皇元首化を環として帝国主義支配の危機を突破するための、日帝の戦争とファシズムへの転換点であることからして、この攻撃をうち破るプロレタリア権力闘争の本格化の断固たる推進であり、労働戦線の産報化をうち破るプロレタリアートの戦列の革命的前進を実現することである。このXデー攻撃に対して、民主主義を対置したりあるいはXデー攻撃をイデオロギー攻撃として限定することは、この

攻撃のまえに無力である。労働者人民・被差別大衆のプロレタリア共産主義革命にむけた戦列の強化、その核心的課題である権力闘争の本格化と非合法革命党の建設こそ、この闘いのただなかで実現していかなければならないのだ。

第二に、全国的に開始されるであろう反革命治安弾圧、「病者」・「障害者」に対する予防拘禁攻撃をうち破る闘いである。

第三に、服喪強制、〝一億総ヒロヒト潰け〟をうち破る闘いである。「歌舞音曲の禁止」、弔旗掲揚、弔慰表明、休業・休校等々の諸攻撃に対して、すべての職場・学園・地域で徹底して反撃しなければならない。Xデーに先行して展開されているヒロヒト賛美キャンペーン、「見舞記帳」、「行事自粛」運動と正面対決せよ。

第四に、天皇制と十五年戦争を賛美する一大キャンペーンに対して、これをうち破り、十五年戦争・沖縄戦をはじめとする帝国主義の支配と戦争に果たした天皇の責任を徹底して暴き弾劾していかねばならない。

第五に、帝国主義右翼ファシストとの対決である。この間殺人テロルにふみこんできたファシストどもは、このXデー攻撃の突撃隊として、さらに悪質に登場してくるであろう。これを必ずやせん滅しぬいていかなければならない。

天皇ヒロヒトの六十三年間は、まさに日帝の戦争と虐殺の歴史そのものである。この帝国主義の支配の歴史をだれが許すことができようか。天皇ヒロヒトの死をとおして「日本的みそぎ」として、十五年戦争の歴史を歴史の反省としてではなく、一転して賛美としておし出し、戦争とファシズム支配を確立していくことを絶対に許してはならない。

十・一徳島、十・二―三東京・関西、十・八宮城・徳島、十・一〇福岡における「記帳所」粉砕につづき決起せよ！

ヒロヒトの死をもって強制される「服喪」に対して徹底して拒否せよ。弔旗掲揚、弔慰表明を拒否せよ。新元号使用を拒否せよ！

ヒロヒトと天皇制賛美に対して、ヒロヒトと天皇制の真実の姿を暴きだし、ヒロヒトと天皇制こそが労働者人民・被差別大衆の隷属・抑圧、差別、虐殺を支えた元凶であることを徹底して明らかにし、天皇制廃止の闘いのうねりを創出せよ！

日本列島を揺るがした 反天皇十月決起

10月1日徳島

十月一日午前十一時、徳島県徳島市幸町二―五、徳島市役所記帳所を攻撃。市庁舎内に突入した武装情宣隊は、記帳受付がおこなわれている一階正面玄関を真下に見下ろす市庁舎十×階より、「極悪天皇ヒロヒトついに死迫る」「いまこそ天皇制をなくせ」と書かれたビラ数百枚をつぎつぎと投てき。膨大なビラは空を覆いつくし、そして記帳所周辺はもとより、市庁舎敷地全域、のみならず構外周辺一帯に大量に舞い散った。当局、ガードマンは空をあおいで茫然自失。

10月2日東京

十月二日午後四時五十分、東京都中央区日本橋二―四―一、高島屋東京本店本館三階、同中央区日本橋室町一―五、三越本店本館六階で同時決起し、発煙攻撃―武装情宣を敢行。買い物客で混雑する両館に猛煙

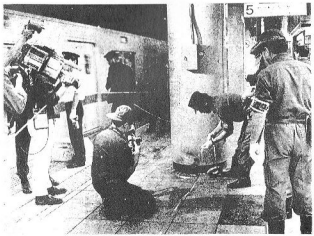
10.3 坂下門記帳所に通じる千代田線二重橋前駅に火炎攻撃

がたちのぼり、ビラが置かれ、Xデー攻撃粉砕への注目と衝撃が走る。

10月3日奈良 東京 京都

十月三日午前四時、奈良県橿原市大久保町五〇九、宮内庁書陵部畝傍陵墓監区事務所に設置された記帳所を攻撃し、徹底的に粉砕、同時にビラ情宣を貫徹した。事務所入口看板に赤ペンキを塗り、大量の牛ふんがたちのぼり、ビラが置かれ、Xデー攻撃粉砕への注目と衝撃が走る。

10.3 奈良・畝傍陵墓監区事務所記帳所を赤ペンキ、牛ふんで攻撃



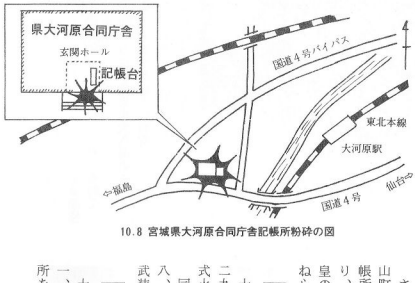
10.3 坂下門記帳所に直近の千代田線大手町駅に火炎攻撃

をぐちまり、徹底して蹂躙し、粉砕した。

ここは、神話上の架空の人物にすぎない神武天皇の「陵」としてデッチあげられている。一九一八年、明治天皇制権力は、"神武陵を見下ろす位置に部落があるのは言語道断、陵がけがれる"なる極悪な差別意識にもとづき、洞部落の強制移転を強行した。まさにこ

の「陵」こそ、部落大衆、闘う労働者人民にとって憎みて余りある対象であり、いままで「平穏祈願」などと称して記帳所を設けていたのである。徹底粉砕あるのみだ。

同日午前八時二十五分、東京で皇居坂下門記帳所に通じる営団地下鉄千代田線二重橋前駅ホーム・大手町駅ホームにおいて、記帳粉砕の時限式火煙攻撃が炸裂。厳重な警備を大胆不敵にくぐり破り、中枢中の中枢＝坂下門記帳所直近に攻めいり、攻撃＝武装情宣を実現したのだ。この闘いは、厳戒態勢下の権力、記帳にやってきたファシストどものど胆をぬき、大混乱におとしいれた。



10.8 宮城県大河原合同庁舎記帳所粉砕の図

さらに同日午前十一時十分、京都府京都市伏見区桃山町古城山宮内庁桃山陵墓監区事務所に設置された記帳所に対し、発煙攻撃＝武装情宣。白昼深々と攻めいり、記帳業務に甚大な打撃を強制した。同陵は明治天皇の墓であり、畝傍陵とともに敵の「聖域」である。ねらいすました連打を炸裂させたのだ。

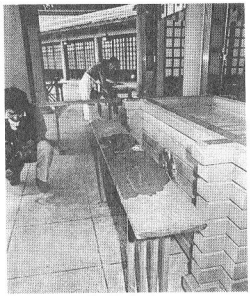
10月8日宮城・徳島

十月八日午前三時三十分、宮城県柴田郡大河原町一二九―一、宮城県大河原合同庁舎記帳所に対し、時限式火煙攻撃、爆竹攻撃をもって武装情宣。

同日午前四時三十分、徳島県徳島市二軒屋二―四八、忌部神社境内に突入し、記帳所に対し火煙攻撃＝武装情宣を敢行。

10月10日福岡

十月十日午前、福岡県福岡市中央区六本松一―一一、護国神社に突入し、本殿の中央に設置された記帳所を徹底的に破壊し、怒りの赤ベンキ五リットルをぶ

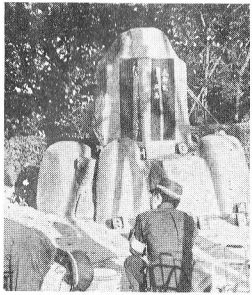


10.10 福岡・護国神社記帳所を赤ベンキ、消火器、火炎により攻撃（記帳台の上の赤ベンキ）

ちまけた。さらに神社の南口一帯を消火器の粉じんで蹂躙し、火煙攻撃をたたきこんで参拝所を粉砕し、武装情宣を貫徹。その徹底ぶりに権力、神社、ファシストどもは大ショック、恐慌状態。

11月11日広島

十一月十一日未明、広島市南区比治山公園一、比治山公園内にあるヒロヒト・[illegible]記念碑を徹底して



11.11 広島・天皇在位六十年歌碑を赤ベンキで攻撃

蹂躙し粉砕した。天皇在位六十年記念の歌碑「奉祝記念碑」には怒りの赤ベンキを一面にぶちまけ、同時に、近接してある「皇太子展望之跡碑」には「天皇制打倒」のステッカーを貼り、ビラまきをおこなう武装情宣を敢行した。

こうして全国十一ヵ所におよぶ武装情宣隊の闘いは、Xデー＝攻撃に痛打をあびせた。武装情宣隊につづけ！

反天皇の闘いに報復ねらう
〝不敬罪〟―天皇弾圧

日本列島を揺るがした十月決起にど肝をぬかれた国家権力は、解放派に対する天皇弾圧―Xデー弾圧を発動し、報復をこの月出している。警察庁は、十一月七日全国警察本部長会議を開き、席上警察庁長官金沢昭雄が「過激派の反皇室闘争の強化」に対して「皇室関係者のテロや皇室関連施設へのゲリラ防止に全力をあげよ」と号令を発している。

十月弾圧の特徴点の第一は、今日における「不敬罪」弾圧としてかけられていることである。革命党本部をはじめ、支社・大学拠点・各捜索場所において、権力は「天皇ヒロヒトの贅美反対」、「ヒロヒトは超極悪の戦犯だ」、「なぐせ天皇制」などと記された反天皇ミニ・ステッカーを発見・強奪することに全力をあげている。「建造物侵入」、「鉄道営業法違反」なる罪名をデッチあげ、明治大学生会館、現代社関西支社などからこのミニ・ステッカーを大量に強奪し、全国でその数は実に一万数千枚を数えている。また現代社ではミニ・ステッカーと同内容の印刷物であるというだけで、八千枚以上のチラシを強奪した。「戦犯天皇追及」と「なぐせ天皇制」をかかげる反天皇ミニ・ステッカーは、明確にその存在そのものが「不敬罪」にあたるものとして、発見したやつを一枚残らず強奪しさったのだ。これを天皇「不敬罪」の復活であるといわずに何というのか。

さらに、十月七日、奈良畝傍（うねび）陵（「神武天皇陵」）への武装情宣に対しておこなわれた関西支社への不当捜索は、なんと「礼拝所不敬罪」なる罪名をもって強行された。まさに「万世一系の天皇は神聖にして侵すべからず」というXデー弾圧―「不敬罪」弾圧にほかならない。

十月七日から開始された天皇Xデー攻撃下の不当捜索は、約一ヵ月の間に実に百十件以上に及んでいる。これは、件数では近年では最高であった八年天皇―サミット決戦下の約三ヵ月にほぼ比肩するものである。しかも、この集中豪雨的なガサ攻撃は、過去と比較にならないほど不当のかぎりをつくした悪質きわまりないものになっている。

一名の活動家や一ヵ所の拠点・居室に対して、実に何種類もの令状をとりつけているのである。十月十七日明大学生会館への二種類の令状によるガサや、翌十八日関西支社への一日に二度のガサがおこなわれている。そして、個人の居室に対して一週間たらずのうちに三回におよぶガサを強行する攻撃が、関東の労働者に集中してかけられている。

また、労働者に対して連続的に出勤・外出時の追尾、身体捜索をおこなっている。東京東部に住む女性労働者に対しては、通行中突然両腕をつかみ捜索令状の提示もせず強引に派出所に連れ込み、四十分にもわたって身体捜索を強行した。そのとき捜索の刑事は「もう○○にいるのは嫌になったろう」と許すことのできない言辞をはき、追尾と身体捜索が身体拘束とどう喝、地域からの露骨な排除攻撃であることを公言しているのだ。

さらに、十月十日、福岡の護国神社に武装情宣が敢行された当日開かれた福岡の三里塚を闘う集会において、権力は会場を装甲車で包囲し機動隊で封鎖し、「住所・氏名を言わねば入れない」と立ちはだかった。その際、ズボンにたまたま赤絵の具のついていた同志に襲いかかり、私服十名がひきずりまわし車におしこめ、「任意同行」と称して中央署に五時間にわたって監禁したのだ。

また、都内の一労働者は、購入したばかりの車に当然にも整備されているブレーキホースのネジが緩められ、走行中にまったくブレーキがきかなくなるという事態に遭遇した。専門家は自然に起こり得る故障のたぐいではまったくないと断言しており、しかもこの件の前にはタイヤの空気を抜くなどの破壊が続いていた。これは、権力ないし革マル・ファシストによる謀殺策動以外の何ものでもない。幸いにもこの同志は大事故にはいたらなかったが、謀殺をねらった工作を徹底して究明し、必ず報復をおこなう。

さらに、捜索のみならず、破壊を強行している。十月二十七日一名の現代社前における身体捜索と車輌ガサにつづいて、十月二十九日埼玉県警・警視庁は現代社に「ガサ」と称した強襲をおこなった。捜索と並行して建物入口を覆っているバリケードをエンジンカッターで切断し完全に破壊しつくしたのだ。そして、カメラやインターホンのコードを引きちぎり破壊した。

日帝国家権力一公安政治警察は、天皇Xデー攻撃下で、いままでのやり方でできなかった弾圧の手口を踏みこえ、戦前治安維持法型反革命弾圧への一挙的なエスカレートへふみだしている。文字どおりの一新たな戦前―弾圧の総攻撃とのしのぎを削る死闘が開始されているのだ。

差別・抑圧・侵略・虐殺の元凶―

今世紀最大の戦犯ヒロヒト

開始された天皇Xデー攻撃のもとでヒロヒトと天皇制に対する賛美がおこなわれている。この賛美キャンペーンとともに「記帳」への動員が「国民的」規模でおこなわれている。われわれはこうした攻撃に心の底からの怒りをおさえることができない。死に際しても悪虚な攻撃をしかけるヒロヒトに怒りをたたきつけ、ヒロヒトの美化・天皇制を絶対に許さず、ヒロヒトと天皇制の反革命的な歴史を徹底して暴いていこう。

アジア人民・沖縄人民虐殺の戦犯ヒロヒト

ヒロヒトは、ヒットラーとならぶ世紀の極悪人である。ヒットラーやムッソリーニが死んだにもかかわらず、ヒロヒトは生きての戦争責任をまったくとることなく居直り、今日まで生きのびてきた。われわれは、ヒロヒトが今日まで生きのびるのを許したことを痛苦にとらえ返し、ヒロヒトの死を天皇制打倒へむけ闘いぬかねばならない。

アジア人民数千万虐殺の戦犯

ヒロヒトの罪状の第一は、アジア人民数千万虐殺の最大の戦犯だということである。

中国―アジアに対する侵略戦争によって、日帝軍隊は数千万アジア人民を虐殺した。それは単に戦闘行為のなかでの殺しあいにとどまらないものであった。実に、南京大虐殺（二十万人を下らない中国軍民を虐殺）、三光作戦（三光とは殺しつくし、焼きつくすの意、八路軍の根拠地とみなした村ごと殺し焼きつくした）という大虐殺や七三一部隊による細菌作戦、人体実験による虐殺をおこなった。また

中国人民を銃剣で刺殺する日本軍
（日本軍は、「天皇の聖戦」の名のもと、「訓練」と称して民間の中国人を虐殺した）

東南アジア各地においても、シンガポールの中国系住民の虐殺や泰緬鉄道での労務者虐待・虐殺などをくり返した。日帝軍隊はこれを「天皇の聖戦」の名のもとにおこなった。「教育勅語」や「軍人勅諭」にみられる天皇主義に骨の髄まで染まった日帝軍隊は、朝鮮人・中国人―アジア人民への差別・排外主義とその裏返しの恐怖のなかで、いかなる軍隊もなしえない残虐行為をくり返した。

この侵略戦争は天皇のもとに「聖戦」として美化され、天皇自身も重大な局面の戦闘では必ず「勅語」を出してはめ称えた。この「勅語」は、「東洋平和」などと美辞麗句をろうしたが、その実は宣戦布告もできず、戦争目的も明らかにできなかったほどの「汚い戦争」であった。それは民族解放闘争に不断におびやかされつつ民族解放闘争を「匪族」といい、蔑視の裏腹の恐怖ゆえの残虐性が支配した戦争だった。

ヒロヒトは、この侵略戦争―太平洋戦争の戦争責任について、七五年の二ューズウィークとのインタビュ―において「終戦に当って私は自分の意志で決定した。…しかし戦争の開始に当っては、内閣が決定し私はそれをくつがえすことができませんでした。これは憲法にのっとった行為だったのです」などと、極端に自分の都合のよい一八〇度反対のテマをのべている。

しかし事実はどうであったか。ヒロヒトは、最高の権力者であるとともに軍の最高指導者でもあり、一つひとつの重大局面ではヒロヒト自身が決断をおこない、戦争を遂行していった。

天皇弁護論者らは、戦後になって、対米英開戦について天皇が開戦に反対であり「平和主義者」であったかのように述べている。しかしヒロヒトは、あくまで

米英と戦争して勝算があるかどうかをめぐって躊躇したにすぎず、対米英戦争をふくむ東南アジア―太平洋諸島への戦争拡大はヒロヒトが決断した。

一九四一年九月、米英開戦をふくむ「帝国国策遂行要領」を決定するにあたってヒロヒトは、くりかえし勝算を参謀総長などに質問した末に決断した。太平洋戦争の開始あるマレー、シンガポールへの進軍に際しては、交渉より奇襲を重視すべきとの細かい指示まで出している。ヒロヒトは戦争の敗勢にいらだち、「何とかしてどこかの正面で米軍を叩きつけることはできぬか」と要求し、これによって「絶対国防圏」の設定がなされるなど、戦争末期ヒロヒトの発言が戦争遂行に大きな影響を与えた。

これに先だつ中国侵略戦争もヒロヒトの決断が大きな影響を及ぼした。一九三一年九月十八日の柳条湖事件は、関東軍による謀略としておこされ、また関東軍などは独断で軍隊を進駐させた。これは当時の制度のもとでは「天皇の統帥権の侵犯」となるものであったが、ヒロヒトはこれを処罰しなかったばかりか、関東軍の行動に「勅語」を出しほめたたえた。

一九三七年七月七日盧溝橋事件以降、日帝の中国侵略戦争は全面化した。翌三八年一月十六日、首相近衛による「爾後国民政府を対手とせず」の政府声明が出された。この決定の過程で、参謀本部はソヴィエトに対する備えをするために中国との和平を望んだ。しかし近衛は中国侵略戦争拡大の道をとり、ヒロヒトはいっきりと近衛の路線を支持した。ヒロヒトは「ソヴィエトに対する準備をしたい」と主張する参謀総長に対し、「それなら、まず最初に支那（中国）に対する蔑称）なんかと事をかまえることをしなければ、なおよかったじゃないか」とし、中国と戦争をはじめたからには最後までやりぬくべきと主張した。こうしたヒロヒトの決断こそが、中国侵略戦争の拡大をもたらしたのだ。

天皇制護持のための沖縄戦強要

日帝の敗戦の過程もヒロヒトの戦争責任を明確に示している。

四五年二月、日帝の敗北が時間の問題となっている時、近衛文麿はヒロヒトに戦局についての上奏をおこなった。近衛は、「このまま戦争を継続すれば、日本に共産革命が勃発する可能性がある。『国体の護持』を条件として対米交渉で和平すべき」と上奏し、ヒロヒトはこれに対して「もう一度戦果をあげてからでないとなかなか話は難しいと思う」と述べた。

ヒロヒトは「国体の護持」のためには「もう一度戦果をあげろ」と主張し、そのために四五年三月から九月までの沖縄戦を強要し、沖縄人口の三分の一にあたる沖縄人民二十万を死にいたらせた。

沖縄戦においては、沖縄人民の「皇国皇民」としての総動員のなかで「鉄血動皇隊」「ひめゆり部隊」へと動員され、住民に対しても「生きて虜囚の辱めを受けず」が強制され、住民に対しても「スパイ」の容疑を着せた住民の処刑、さらには「集団自決」の強要がなされていったのである。

八月六日―九日の広島・長崎への原爆投下、八月九日のソ連の参戦にいたって「共産革命」に恐怖したヒロヒトと支配階級はポツダム宣言の受諾を決定した。その「決断」も「国民のため」では絶対にない。八月十五日のヒロヒトの「紹書」は、「朕はここに国体を護持し得て忠良なる爾臣民の赤誠に信倚し」云々と、戦争の目的が「天皇制のためにあり敗戦の決断も天皇制の維持の」点にあったことをムキ出しに語っているのだ。

そして日帝敗戦後も天皇制の維持・延命のためにヒロヒトは必死に行動した。このことは、四七年九月のGHQ政治顧問シーボルトに対する天皇メッセージに示されている。

ヒロヒトの顧問・寺崎英成が伝えたとヒロヒトの意志は以下のようなものである。「寺崎氏は、米国が沖縄その他の琉球諸島の軍事占領を継続するよう天皇が希望していると、言明した。天皇の見解では、そのような占領は、米国に役立ち、また、日本に保護をあたえることになる」と。

ヒロヒトがマッカサーと会ったとき「私の一身は、どうなってもかまわない」と言ったというデマが流されている。このデマは、「天皇美談」として Xデーの際には大量に流されるだろう。これははっきりとデマである。シーボルトへの「天皇メッセージ」は、天皇制の延命のために沖縄の米軍占領の継続を主張したことを示しているのであり、「天皇美談」はまったくのデマである。

七五年訪米後の記者会見で、ヒロヒトは戦争責任についての質問に対し、「そういう言葉のアヤについては、私はそういう文学方面はあまり研究していないので、よくわかりませんから、そういう問題については

お答えできかねます」と言ってのけ、さらに原爆の投下をめぐっては「原子爆弾が投下されたことに対しては遺憾には思っておりますが、こういう戦争中であることですから、どうも、広島市民に対しては気の毒ではあるが、やむを得ないことと私は思っています」と言い放ったのである。

またヒロヒトは訪米直前のニューズウィークとの会見においても、「終戦」は自分が決断したが「開戦の時は、政府・統帥部隊が決定していたことであり、私は容認せざるをえなかった」と発言した。

ここにみられるのは、戦争責任を徹底して回避し居直る発言である。しかも天皇主義者やこれに連なるマスコミは、先にのべたような「天皇美談」を流しているのだ。このようなこの間のヒロヒトおよび天皇主義者のデマゴギーを粉砕し、天皇の戦争責任を徹底して追及していかねばならない。

差別・抑圧の元凶ヒロヒト

ヒロヒトはまた、差別・抑圧の元凶である。

天皇制は、天皇を頂点とし部落民をその対極におく資本主義的身分制を形成し、部落大衆を差別・隷属・窮乏・虐殺の運命にたたき込んできた。一九一八～二〇年の奈良県部落の強制移転は、架空の天皇の陵である“神武天皇陵”を「眼下に見下す」位置にあるという理由によるものであった。これは、部落大衆を天皇（制）のもとにひざまづかせようとするものであった。一九二二年、「皇族が来るので目ざわりだ」という理由で大分県別府の的ケ浜にあった部落が警官によって焼きうちされた。またこの年、水騒動に決起した部落大衆への報復として和歌山の二人の部落民が死刑判決をうちおろされ虐殺された。

一九二六年天皇制下の軍隊に対する差別糾弾闘争を闘った松本治一郎らに対して、国家権力は「爆破事件」をデッチあげ投獄した。日本の闘いのなかで最も断固として闘った水平社は、にもかかわらず侵略戦争の下でファシズム融和へと転落していったのである。

天皇制は、侵略戦争の全面化と天皇制ファシズムのもとで「天皇のもとでの融和」を部落大衆に強制した。部落大衆を戦争へと狩りたてようそう差別・隷属・窮乏・虐殺の運命を強制していったのである。

また、天皇制は、「障害者」を差別・隔離・抹殺してきた。

天皇制国家は、出発点から「精神障害者」を治安対策の対象とのみ考え、「私的監置」制度によって家族制度を「病者」の隔離・抹殺の担い手として位置づけていた。

こうした天皇制の「障害者」抹殺思想の核心を示すものこそ、三一年刑法改悪法案、四一年治安維持法全面改悪に貫かれていった小野清一郎の「皇道刑法」の思想である。ファシスト小野は、日本法を「皇祖の神勅に依り肇国せられた国家」＝「皇国」の道義の表現であるとし、これこそは、「法理中の法理」「道義中の道義」「永遠絶対」であるとする。こうした“皇国思想”のもとに天皇制は「障害者」に対し、“天皇制の神聖をけがすもの”“大和民族の血の純血をけがすもの”として抹殺をおしすすめてきた。

とりわけ戦時下においては、一九三五年には、ナチスの「断種法」にならった「国民優生法」へむけた運動が開始され、「民族の花園をあらす雑草は、断種によって根こそぎ刈り取り、日本民族の永遠の繁栄を期さねばならない」（東大・永井潤）として「障害者」抹殺を公然と主張していく。

一九四〇年に、「国民優生法」が成立する。この上程説明では「国民素質の向上を図りこれによって国家将来の発展を期せんとする」「悪質なる遺伝性疾患の素質を有する国民の増加を防遏する」と「障害者」抹殺をおしすすめようとした。このもとで「障害者」に対する「優生手術」強制や抹殺がおこなわれた。

さらに、社会政策総体の戦時厚生事業への転換が画られ、「如何に保護救援するも到底有能なる人的資源として育成しうる見込尠なし」とするものを「消極的」社会事業とし、「積極的」社会事業と区別してこれを廃止していった。

こうしたなかで、「障害者」は戦時下、餓死・病死を強制されていった。

植民地支配の元凶ヒロヒト

ヒロヒトは、朝鮮・台湾・中国東北をはじめとする植民地支配の元凶である。

ヒロヒトの摂政時代、関東大震災下で朝鮮人・中国人大虐殺がなされた。朝鮮人の闘いに対しては独立の主張そのものが「国体の変革」を主張するものとして治安維持法弾圧をかけ、朝鮮共産党をはじめとする人々を死刑―虐殺した。一九三〇年台湾の霧社蜂起への鎮圧では三百人近い虐殺がおこなわれた。

一九三一年柳条湖事件以降、十五年戦争の開始のも

とで、「一視同仁」「内鮮一如」「五族協和」などをかかげた「皇民化」政策がいっそう露骨となった。「創氏改名」、朝鮮語（中国語）の禁止、民族文化の破壊、神社参拝の強要、「皇国臣民の誓詞」唱和強制がおこなわれた。天皇制は、朝鮮・台湾人民の民族性を徹底して破壊したのである。

朝鮮植民地支配は、多くの朝鮮人に日本・中国東北への移住を余儀なくさせたが、三〇年代末期には、文字どおりの朝鮮人強制連行がおこなわれ、炭坑、発電所建設、鉄道建設などの強制労働へかりだされ、苛酷な労働の末多くの虐殺がおこなわれた。

侵略戦争が激化すると、朝鮮・台湾の人々を軍属・軍夫として戦争にかりたて、女性を「従軍慰安婦」へとかりたてた。三〇年代末には志願兵制度をおこない、「皇民化」した者の代表のごとく戦争へ動員し、ついには植民地への徴兵制を実施した。こうして戦争へとかりたてられた朝鮮・台湾の人々が、戦後B・C級戦犯として処罰されたことをも忘れてはならない。

戦犯追及し、差別・抑圧の元凶をうち倒せ

こうした差別・抑圧の頂点にたち元凶として君臨したのがほかならぬヒロヒトなのである。そしてヒロヒトの即位時には、天皇制にしたがわぬものへの弾圧がおこなわれ、共産主義者だけでなく朝鮮人や「精神障害者」への弾圧は苛酷をきわめた。即位式をまえに逮捕は七千人をこえ、検束は二十万人に達した。このなかで数人が虐殺された。また朝鮮人とみればすべて検束し、「精神障害者」はすべて隔離し予防拘禁した。

しかもまた、天皇制権力は治安弾圧によって労働者階級の団結の破壊をねらい、軍隊・警察・ファシストを投入して争議を鎮圧し労働組合を暴力的に解体した。そして戦闘的労働運動の潰滅攻撃のうえに、「皇国産業道」を標榜する「産業報国会」をとおして侵略戦争遂行へと動員していったのだ。

ヒロヒトは差別・抑圧の元凶であり、差別主義・排外主義の頂点にたつ存在だ。ヒロヒトの賛美を絶対に許してはならない。そして、こうした天皇と天皇制を国家権力の一部として打倒していくことは、日本プロレタリア人民の責務である。ヒロヒトの罪状をとことん暴き、ヒロヒトの死を天皇制打倒—国家権力打倒にむけ巨大な闘いを構築していこう。

天皇制と沖縄支配

浜辺　比等志

ついに天皇ヒロヒトの死が迫っている。一挙に開始されたXデー攻撃を粉砕し、いまこそ天皇制廃止、日帝国家権力打倒に全力を集中せねばならない。

明治維新後の日本の国家的確立は、対内的には、没落士族層の鎮圧、自由民権運動の懐柔と鎮圧、対外的には、琉球処分をとおした台湾侵略、日清・日露戦争、「朝鮮併合」が天皇のもとに遂行されることをもって進行した。それゆえに、天皇（制）と対決する闘いは日本帝国主義の存立そのものを撃つ闘いである。

日帝による沖縄支配の歴史は、明治天皇制権力のもとでの琉球処分、皇国臣民化攻撃、ヒロヒト自らによる沖縄戦の強要、そして「天皇メッセージ」による米軍政支配下への叩きこみ、さらに一九七二年帝国主義的反革命的統合としての「返還」として、沖縄人民に対する差別・虐殺の歴史である。

そしてそれは同時に、沖縄労働者人民の闘いの歴史である。われわれは、“沖縄ソビエトを一環とする沖縄—日本—本土”貫くプロレタリアソビエト権力樹立」の戦略を深化し、プロレタリア革命＝共産主義としての沖縄人民解放につき進まねばならない。

明治天皇制権力による琉球処分

琉球処分は、一八七二年の「琉球藩」設置から、七九年明治政府による武力的威圧のもとでの「沖縄県」設置をへて、分島問題の終末までの一連の過程をとおした、明治天皇制国家による琉球の武力的併合である。そしてこれは、明治政府からする欧米列強への軍事的緊張—対抗力（排外主義）を、同時に対内的な国民統合力として政治支配を確立していく過程である。

成立まもない基盤の弱い明治政府は、近隣アジア（朝鮮—中国）への侵略・抑圧をもって、“国威発

揚”、「国権拡張」をなし、また天皇制国家の威信を強化することによって欧米列強に対抗しようとしていた。対内的には没落士族層の反乱の鎮圧と自由民権運動の粉砕・懐柔をもって明治天皇制国家を確立していくのである。

一八七一年に起こった台湾での宮古島民遭難殺害事件をとり上げて明治政府の台湾出兵が目程に上せられた。政府は「琉球問題」解決の絶好の機会として台湾出兵をすえ、その前提条件をつくり出すために、まず七三年琉球王国を琉球藩とし、管轄をそれまでの鹿児島県から外務省に移し、琉球と諸外国との条約等を継承した。そして七四年西郷従道らによる台湾出兵が強行され、政府は中国との間に宮古島民を「日本国属民」とした議定書をかわしていく。七五年には熊本鎮台兵を琉球に進駐させ、琉球支配層をゆさぶり、明治政府への「帰順」を強制していく。そしてついに七九年三月二十七日、処分官松田道之「明治政府による「沖縄県」設置が武力的に断行される。さらに、琉球の「帰属問題」は、分島・改約問題で揺れつづけ、その解消によって日本の版図に組みこまれていく。

明治天皇制国家はこの琉球処分を突破口に、日清・日露戦争への突撃、「朝鮮併合」とアジア侵略に突撃していくのであり、皇軍の確立と皇民化教育を徹底し、天皇制の絶対的強化をはかっていくのである。

われわれが今日的に確定し、実践的に鮮明にしていかねばならない点は次の点である。すなわち、沖縄における旧い共同体の天皇制（日本国家）のもとへの統合・同化が、外にむかっては国家として、一八九四年日清戦争を転機として一挙に進み、沖縄が一方では日帝のアジアとりわけ「南方」侵略の尖兵となり、他方皇軍による住民虐殺と「集団自決」の強要に凝縮される差別・虐殺の沖縄戦へと結[illegible]していったことについてである。戦争とファシズムの突撃のもとでまさしく差別と同化はひとつのものであり、究極的には他者をも自らをも虐殺していくものである。

戦前、沖縄における社会主義運動の歴史において、一九二一年はじめてメーデーを組織化していくが、徹底した弾圧にみまわれている。しかし「ソテツ地獄」と呼ばれる沖縄経済の破綻状況のなかで、労働者・農民は、スト・争議などさまざまな形で闘いにたちあがった。二六年に結成された沖縄青年同盟は、荷馬車、導工、大工、左官などの組合や、教職員を中心とした社会科学研究会の組織化をはじめ、三・一五―

四・一六弾圧の嵐のなかでも運動的高揚を闘いとっていったのである。そして農民運動として大衆運動をまきおこし、沖縄全島に衝撃をはしらせたのが大宜味村村政革新運動である。一九三二年沖縄教育労働者組合（「OIL」）弾圧が苛酷をきわめるなかへ被弾圧者二名が出獄直後に死亡していく、八月に村政革新同盟を結成し、一九三二年日本無産者消費組合連盟の創立にも関わっていく。

しかしながらこの運動は、三一年の「嵐山事件」といわれる羽地村ハンセン氏病療養所建設反対運動と結びつき、ハンセン氏病者への徹底した差別・排撃を煽動していく。嵐山の反対大会には三万の大衆が動員され、屋部・安和の部落での患者の家屋の打ち壊し、焼き打ちへと尖鋭化していったのである。「聖戦遂行・祖国浄化」をスローガンとした戦時一障害者一抹殺の攻撃＝ハンセン氏病者への治療ではなく隔離・抹殺を目的とした「強制収容」攻撃に、地域からのハンセン氏病者の排撃をもって呼応していたのである。

徹底した一斉弾圧の集中とともに、天皇のもとへの「排他的忠誠心」を煽動する皇民化攻撃の差別主義・排外主義と根底的に対決しえず、村政改革新運動は潰滅させられ、三三年には、大宜味村に青年訓練所・国防婦人会が設立され、以降、翼賛模範村となっていったのである。

天皇Xデー攻撃―天皇の死を一刻でもひきのばすことによる「排他的忠誠心」の煽動―反革命国民動員をうち砕いていく闘いの先頭に立つことこそ、戦前沖縄階級闘争の皇民化攻撃への敗北の歴史に答えきる現下の革命的実践的任務である。一九三〇年代初頭のこれらの闘いの敗北と差別主義・排外主義への屈服は、一九四〇年の大政翼賛会沖縄支部の結成、農業報国会、大日本婦人会、部落会、町内会、隣組の組織化として国民総動員に組こまれ、沖縄戦の悲惨にいきついたのである。

天皇制護持のための沖縄戦と「天皇メッセージ」

沖縄戦と沖縄人民の差別・虐殺

沖縄人民の三分の一を死に至らしめた沖縄戦の強要は、天皇ヒロヒトの決断にほかならない。B29の「本土」爆撃が激しくなってきた一九四五年二月十四日、

元首相近衛文麿は、天皇ヒロヒトにつぎのように「上奏」している。近衛は「最悪なる事態は最早必至なり」との判断のうえで「国体護持の立場よりすれば一日も早く終結すべきものと確信する」「敗北だけならば国体上はさまで憂うる必要なしと存じ候。国体の護持の建て前より最も憂うるべきは敗戦よりも敗戦に伴って起ることあるべき共産革命に御座候」と述べた。しかしヒロヒトは「我が国体については近衛の考えとは異なり、軍部は、米国は国体の変革までも考え居るよう観測し居るが」、「（国体＝天皇制の護持の交渉を有利にすすめるためには）今一度戦果を挙げてからでないと中々話は難しいと思う」と述べて沖縄戦突撃を決定し、さらには広島・長崎への原爆投下をひきだした。

したがって沖縄戦はもはやも戦闘そのものの勝利を目的とせず、いかに長びかせ、いかに上陸米軍への打撃を強制するかという戦略持久作戦であった。そのために、戦闘力たりえない沖縄人民は虐殺され十代の少年から六十代の老人までが、戦闘員として動員された。

住民に対しては「生きて虜囚の辱めを受けず」（「十人一殺」の「戦陣訓」）「爾今各部隊は各局地における生存者中の最上級者之を指揮し、最後迄敢闘し悠久の大義に生くべし」（「牛島司令官自決時の命令」）と「本土を生かすため、沖縄という一島しょを捨て石にし、無辜の住民を道連れに」（「鉄の暴風」）死の彷徨と幾多の「ひめゆりの悲劇」を強要したのだ。

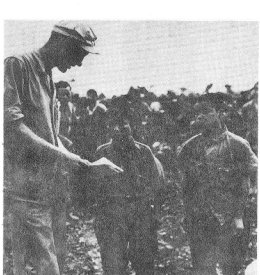
守備隊は、沖縄上陸当初より沖縄を占領的戒厳令におき、食料・物資・家屋の徹底的供出と一日五万人にものぼる軍作業への動員を強制し、兵力不足を「防衛召集」二万五千人、「志願」という形で召集した「義勇隊」二千三百人（男子十五歳～六十歳まで、女子十七歳～四十歳）の現地総動員で乗り切ろうとする。こうして各学校）とにも「鉄血勤皇隊」「看護隊」が組織され、天皇の名のもとに死を強制されていった。

沖縄連隊区司令部の沖縄人民にたいする蔑視は、「皇室・国体に関する観念、徹底しからず」「進取の気性の乏しく優柔不断、意志はなはだ薄弱なり」「軍事思想に乏しく、軍人となるをこのまず」という報告文に示されており、四五年四月の軍命令では、「爾今軍人軍属ヲ問ハズ、標準語以外ノ使用ヲ禁ズ。沖縄語ヲ以テ談話シアル者ハ間諜トテ処分ス」が出され、数多くの日本軍による住民虐殺がおこなわれたのだ。沖縄文化・習慣・生活様式そして言語までも抹殺する「皇国皇民化」攻撃は、戦争下においては沖縄人という存在そのものに抹殺へとつき進んだのだ。

日本の降伏三日後の八月十八日に、在島朝鮮人一家七人が日本軍鹿山隊によって無残にも殺されている（「久米島の虐殺」）。また死の彷徨の過程で避難壕（ガマ）から住民が追い出されたり、泣き叫ぶ幼な児が絞め殺されたりと、あまりにも残虐な行為が日本軍によっておこなわれている。

住民虐殺のあった所では必ずといっていいほど「集団自決」がひき起こされている。慶良間列島、渡嘉敷島の日本軍赤松隊は、わかっているだけでも十数人をスパイとして“処刑”＝虐殺し、米軍侵攻のわずか五日前にはこの「こと、ここに至っては、全島民、皇国の万歳と日本の必勝を祈って自決せよ。軍は最後の一兵まで戦い米軍に出血を強いてから全員玉砕する」との自決命令を下している。住民には自決用の手榴弾がわたされていた。

「瞬時にして、――男、女、老人、子供、嬰児の――肉四散し、阿修羅の如き、阿鼻叫喚の光景がくりひろげられた。死に損なったものは互いにこん棒で打ちあったり、剃刀で自分の頸部を切ったり、鍬で親しいものの頭をたたきわったりして、世にも恐ろしい光景があっちも集団でも、こっちも集団でも同時におこり、恩納河原の谷川の水は、ために血でそまっていた」（「鉄の暴風」）。そして赤松は、八月二十三日に部隊よりも早く投降しているのである。



16歳以下の学校生徒も「鉄血勤皇隊」として組織され戦闘を強制されていった

天皇メッセージによる米軍支配へのたたきこみ

一九四七年、極東国際軍事裁判所で天皇戦犯問題が論じられている時、天皇ヒロヒトは寺崎英成を通じマ

ッカーサーに宛て、次のようなメッセージをおくった。

「天皇はアメリカが沖縄をはじめ琉球の他の諸島を軍事占領しつづけることを希望している。その占領は、アメリカの利益になるし日本を守ることにもなる。そうした政策は、日本国民がロシアの脅威をおそれているばかりでなく、左右両翼の集団が台頭し、ロシアが事件を惹起しそれを口実に日本の内政に干渉してくる事態をも恐れているが故に、国民の広範な承認を得るだろう。

アメリカによる沖縄（と、要請がありしだいの諸島しょ）の軍事的占領は、日本に主権を残存させたかたちで、長期の―二十五年から五十年乃至それ以上の―貸与をするという擬制の上に為されるべきである。天皇によれば、この占領方式はアメリカが琉球列島に恒久的意図を持たないことを、日本国民に納得させることになるだろうし、それによって他の諸国、とくにソヴィエト・ロシアと中国が同様の権利を要求することを差し止めることになるだろう」

ここで語られているのは、天皇ヒロヒトが、己れ自身と「国体」＝天皇制の延命をかけて恐怖するものがロシア＝「共産主義」と足下からのプロレタリア革命運動の爆発であるということだ。

この「天皇メッセージ」こそ、「天皇ヒロヒトが戦後においても日帝国家権力の頂点（一環）に位置し、国際反革命の最先頭にたつことを宣言し、そのために沖縄を米軍占領下においたことを示すものにほかならない。マッカーサーをして、「天皇一人は機械化部隊二十個師団の軍隊に価する」とうならせ、自らの延命をはかった天皇ヒロヒトの決定的勝手のひとつが、この「天皇メッセージ」＝米帝軍事支配下への沖縄の叩きこみであった。これにより沖縄は、「基地沖縄」の現実に叩きこまれたのだ。

72年「返還」とは何か

米軍支配下に叩きこまれた沖縄は、中国・朝鮮革命、ベトナム―東南アジア人民の闘いをにらんだ「太平洋の要石」＝国際反革命戦争出撃拠点としてうち固められていった。

平坦地のほとんどが銃剣とブルドーザーによって基地として強奪されていく。戦前日帝天皇制権力下においてキビのモノカルチャーを強いられ、他の産業の発展を抑圧されてきた沖縄人民にとって土地強奪は死活問題であった。日帝は移民・植民のいい棄民を米帝とともにおし進めていく。米帝の強圧的な軍事支配・差別支配に対する沖縄人民の怒りは「島ぐるみ」の土地闘争として爆発し、「復帰闘争」へとつき進む。「復帰闘争」の高揚は、米帝の沖縄支配を揺るがし、〈基地・沖縄〉の存続を危うくした。

ベトナム人民の闘いの前進が戦後世界体制の崩壊を決定づけるなかで、米帝にかわって日帝はアジアにおける反革命盟主として登場し、「復帰闘争」を逆手にとって、沖縄人民の闘いをおし潰し〈基地・沖縄〉の強化にのり出した。それは、「復帰」後日帝がまず手がけたのが、自衛隊沖縄派兵であり、天皇（皇太子）の「復帰」記念三大行事への列席＝訪沖攻撃であったことに端的にあらわれている。

七二年「返還」は、沖縄を国際反革命戦争の出撃拠点として強化し、またそれを脅かす沖縄労働者人民の闘いの前進（コザ人民決起をはじめとする）を、「復帰＝国民的悲願達成」として帝国主義ナショナリズムのもとに収斂させることによる日帝の沖縄支配として貫徹しようとする攻撃にほかならなかった。

沖縄派遣自衛隊は、「最大の任務は沖縄の治安」と意志一致し、宣撫工作を強めながら、海外派兵をにらんだ日米共同演習をくり返し、反革命実戦部隊としての展開に入っている。皇太子アキヒトは「復帰」後再三上陸し、自ら「沖縄通」を吹聴しつつ、沖縄戦―米軍政下への叩きこみの張本人、五千万アジア人民虐殺の戦犯天皇ヒロヒトの沖縄上陸による沖縄皇民化攻撃の完成への地ならしをおこなってきたのである。

87年天皇決戦ひきつぎ　知花―Xデー決戦へ

八七年天皇ヒロヒト（一名代アキヒト）の沖縄上陸攻撃こそ、天皇ヒロヒトによる沖縄戦の強要、「天皇メッセージ」による米軍政支配への沖縄人民の叩きこみを居直り、「沖縄の戦後史」を「総決算」し、再度天皇（一制）のもとへ屈服せよと迫るものであった。

日帝国家権力は「返還」後十五年の皇民化攻撃の総仕上げとして全力をあげた攻撃をかけてきた。とりわけ、八五年からの文部省通達等による「日の丸・君が代」への学校行事―卒業式・入学式への押しつけは、二年後の「海邦国体」への天皇の出席と「日の丸」掲揚、「君が代」斉唱にむけた地ならしであり「踏み絵」であった。

それまでの沖縄の小・中学校での「日の丸」掲揚の実施率は六％台、「君が代」斉唱は〇％であった。

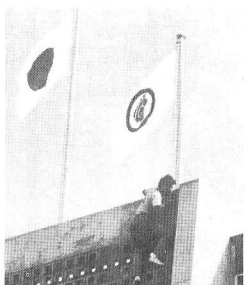
沖縄戦において、三人に一人、二十万が天皇の名のもとに虐殺された歴史が、「もう二度と戦争はくり返さない」「再度の沖縄戦強要を許さない」という反戦・反天皇の闘いとして貫かれているのだ。読谷高校の卒業式において掲揚されようとした「日の丸」をどぶへ投げ棄てた闘いも、多くの小・中学生が国体の「君が代」演奏を拒否したのも、そして知花昌一氏が「日の丸」を引き降ろし焼きすてたのもこの闘いが現在に連綿とひき継がれてきたのだ。

同化主義反革命革マルを尖兵とする日帝の皇民化攻撃に屈服した労戦産報化の流れをつき破り、戦闘的労働者人民は、「日の丸」「君が代」拒否のすわり込み、ワッペン闘争を闘いぬいた。

われわれは、こうした沖縄労働者人民の世代をつらぬいた全島的決起と結びつき、八七年天皇上陸阻止実を結成、沖縄日雇労組とともに、連日の大衆的実力決起を闘いぬいた。革命軍は、沖縄―「本土」貫く三波のゲリラ戦を炸裂させ、沖縄皇民化―「新たな沖縄戦」の強制の攻撃を打ち破った。

いま沖縄は、八七年秋以来戦の革命的激闘をひき継ぎ、知花公判闘争を政治的集中環として、天皇Xデー攻撃に真正面から天皇（制）廃止、日帝国家権力打倒をかかげ、天皇主義右翼ファシスト＝日思会、継新党の白色テロルと対峙しながら闘いぬいている。

天皇Xデー決戦をめぐって、われわれはまぎれもなく歴史的転換点に立っている。天皇（制）への屈服は「新たな戦前」への道である。この決戦攻防の一切が日本階級闘争・沖縄解放闘争の明日を決するのだ。Xデー決戦に全力を傾注し、沖縄皇民化攻撃を粉砕せよ！



掲揚台へとのぼる知花昌一氏（87年10月26日）

天皇制と部落差別

高市　結実

八六年十二・一一地対協意見具申、八七年三・二七啓発推進指針として今日うちだされてきた帝国主義部落政策の全面展開こそ、天皇（制）の政治舞台への全面登場をテコとする反革命戦争とファシズムの突撃の一環にほかならない。

地対協意見具申―啓発指針の反革命基調の特徴は、八・九部落民虐殺宣言を背景としつつも、もう一歩ふみこんで、部落解放運動および組織にまで立ち入り、ファシズム融和運動へとたたきこもうとしている点である。

今日の日帝の攻撃性格は、まさしく、労戦の産報化と呼応した部落解放運動のファシズム融和運動へのたきこみとしてあり、いまこそわれわれは、全国水平社およびそれに先行した西光万吉はじめとする全水指導者の天皇制ファシズムへの総屈服について、きっちりと総括を出しきらねばならない時にきている。天皇Xデーをもった一挙的な国内階級闘争の圧殺―解体と反革命戦争突撃に対決し、まさに天皇Xデーを天皇（制）„最後の日„の絶好機としてひきよせるべく闘いぬこうではないか。

部落差別と天皇（制）の関係を、まず歴史的に明らかにし、全水の闘いの地平を明らかにし、同時に、全水の戦争と天皇制ファシズムへの総屈服の総括視点を提起したい。

部落差別と明治維新

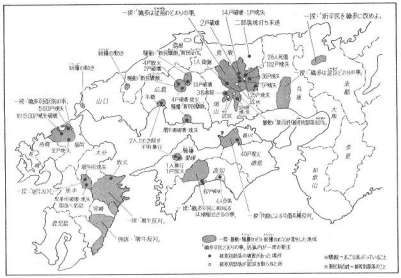
一八七一年八月二十八日、明治政府は、天皇の名をもって「太政官布告第六一号」として、「穢多、非人称廃止セラレ候条　自今身分職業共平民同様タルヘキ事」をうち出す。

いわゆる「解放令」とよばれるが、注意してみてお

かねばならないのは、「差別からの解放」を謳ったものでも何でもなくただ「えた、非人というよび方の廃止」、「職業を選ぶのは自由」だとしたにすぎないものであることだ。

一八五六年の岡山県渋染一揆をはじめとした部落大衆の決起はあったにせよ、明治政府の目的は部落大衆の闘いの鎮圧が目的というよりも、徳川幕藩体制下に部落民が所有する農・宅地への年貢の免除が一部あったことや、また部落は里数計算から除外されていたことなどを再編して、資本主義的土地所有制度の整備とそのことをもった税制度（国家収入の確立）の確立に重点がおかれていたとみるべきであろう。

そして、一八七一年七月一日の廃藩置県の強行と七二年壬申戸籍の完成は、天皇制国家の支配体制の確立としてあった。この壬申戸籍において、「天皇（皇族）―華族―平民」という資本主義的身分制度が産声をあげていくのだ。また、このいわゆる「解放令」は、一方で極悪な差別主義襲撃―「解放令反対一揆」をもまきおこしている（図参照）。京都　兵庫、岡山、広島、愛媛、香川、高知、福岡、大分、宮崎、熊本等、西日本を中心に農民による部落の焼き打ち・虐殺が強行されたのだ。


一揆「解放令反対」
一揆「解放令反対」
一揆「解放令反対」

れば、この的ケ浜焼き打ち事件について、次のように記述している。

「その頃波静かなる別府市的ケ浜には一九棟の乞食小屋がずらり並んで天下の醜観を呈していた」、「松の根を篠架として雨露を凌ぐ位で一見住居とは見做され難き程度に巣喰った山窩の一群が何時とはなしに出来上った」、「二人の竹細工職人を除く外は強窃盗の類であった。……浴客に不快・不安の念を与え、公安上にも犯罪予防上にも、はなはだ憂虞にして有害なる存在だというので別府署では一同に因果を含めて小屋を破壊させそれを波打ち際につみかさね……巡査十数名が立会って焼き払ってしまった」とある。

「皇族が通るので目ざわり」として焼き打ちされた別府・的ケ浜事件で家を焼き払われた人々

事実は、的ケ浜にある「弓掛松」を「御召列車」から皇族（別府での日本赤十字社総会に参加するために来た「載仁親王」という輩である）が見るという理由をもってこの焼き打ちが強行されており、焼失家屋二十一戸、焼け出された人六十余名（うち納税者、いわゆる「叙勲者」もふくむ）として、官憲が描きだそうとしている部落の実態にも差別的意図が示されている。

一九二二年こそ、全国水平社結成の年であり、日本共産党の結成の年である。いわば、一九一七年ロシア革命の勝利、一八年米騒動、一九年朝鮮三・一独立蜂起、五月中国五・四運動という国内―外の階級闘争の激化のなか、日本における共産主義運動やその影響下にある大衆運動が組織的格闘にふみだした年にあたるのが一九二二年である。

米騒動において、京都柳原部落の部落大衆の決起をはじめ近畿、中四国における部落大衆の決起はすさまじいものであった。とりわけ、官憲は「部落民は米屋を襲うだけではなく派出所や警察署を襲撃し、また組織的計画的でとりしまることが困難」と弱音を吐露しているほどである。

そしてその報復として、和歌山の二人の部落民が唯一、米騒動をめぐる裁判において、直接殺人行為をおこなったかどうかの事実が不明なまま、死刑判決をうちおろされ、虐殺されたのである。まさに、日本帝国主義が迎えた未曽有の危機のなか、二人の部落民の虐殺をもって極刑弾圧を頂点とした反革命弾圧を強行し、日本階級闘争の鎮圧と再度天皇制の強化および差別主義・排外主義をもった国民統合のたて直しへとつきすすむのだ。

このような情勢のもとで、的ケ浜部落の焼き打ちという暴挙は、官憲の手によって強行されたものにほかならない！

そしてこれは、部落に対してだけではなく、翌二三年関東大震災における朝鮮人の大虐殺および大杉栄をはじめ社会主義者の虐殺の強行として進んできたのだ。

日本資本主義と天皇（制）国家の危機に際しては、天皇（制）による部落抹殺―部落民虐殺を核心とする部落支配が貫徹されるのだ。

天皇の軍隊と闘いぬいた差別糾弾闘争

一九二二年、全国水平社の結成をうけ、全国各地で差別糾弾闘争の炎が燃えあがった。翌二三年には、奈良において、差別者に加担し水平社の糾弾闘争に武装敵対した右翼国粋会と闘いぬく水国争闘も展開され、そして、とりわけ一九二六から二七年にかけて、軍隊に対する差別糾弾闘争が果敢に闘いぬかれた。

一九二四年、二三年関東大震災の混乱を戒厳令、治安維持令の発布と軍隊の出動、および朝鮮人・社会主義者の虐殺でのりきろうとした日帝は、国家総動員体制の形成に、中国階級闘争の激化を見すえ、ふみこんでいく。二五年～三一年までの八年間に約一億四千万円を投入して、航空部隊の充実、戦車隊・高射砲隊の新設、化学兵器の研究機関の新設を実施していき、近代化された軍隊への再編を進め、さらに「一、中等学校以上の学校に現役将校を配属し、軍事教練を必修

正科とする。二、小学校を卒業して上級学校へ進まない青年のため、青年訓練所をもうけ、四年の間に修身公民科、軍事教練、普通学科、職業科の訓練をうける。一、二の課程を終了したものは、徴兵された場合、歩兵在営年限一年半を一年に短縮する」という軍事教練の全国民化を実現していった。これにより、近代化された装備をもつ常備軍を中核に、戦時には軍事教練をうけた国民を召集して大軍団を編成し、総力戦・長期戦を戦う態勢を確立したのである。

軍隊内の差別事件は、アジアに侵略していく天皇の軍隊としての強化を背景に激発していく。それに対して、部落大衆は徹底糾弾を闘いぬいた。

一九二六年、和歌山県での中学校の軍事教官がおこした差別事件への糾弾闘争、大阪での在郷軍人による差別糾弾闘争を闘い、そして福岡連隊糾弾闘争が闘いぬかれるのである。

福岡連隊差別糾弾闘争は、二六年一月福岡第二十四連隊で、兵士が「和田軍曹は清国人だ」と四本指をだした差別事件を突破口に、この差別事件は氷山の一角であることをふまえ、水平社同人を軸とした部落出身兵士によって「兵卒同盟」がつくられ、つぎつぎと軍隊内の差別事件を糾弾し、水平社の総力をあげた闘いとして開始された。そして、同年七月二日の水平社と第十二師団太田憲兵隊長との確認事項（七月下旬までの連隊講演会の開催等）が、二週間後突然破約され、水平社は「差別の伏魔殿である軍隊」に対する闘いをさらに強めていく。

「天皇の軍隊」の差別事件を徹底糾弾した福岡連隊事件の被告の激励会（1928年、右上○内は松本治一郎）

一方、水平社の果敢な闘いのまえに窮地に陥った軍隊当局は、警察権力と一体となって、水平社への弾圧にのりだした。この弾圧の過程は、二六年十一月から二七年六月であり、「大正」―「昭和」の過程であることもふまえておく必要がある。

弾圧の手口は、「福岡連隊爆破未遂事件」をデッチあげ、十一月十二日松本治一郎氏をはじめ福岡水平社の指導的活動家の不当逮捕、十一月十五日大阪府「特高」が水平社無産者同盟本部、無産青年同盟本部などを家宅捜索し、木村京太郎、松田喜一らを不当逮捕していくというものであった。水平社組織の潰滅をねらう弾圧といわねばならない。

そしてこの弾圧は、一名が判決以前に拘置所で、「三年の懲役刑」をうけた福岡水平社委員長藤岡政右衛門はじめ五名が下獄後、獄死・虐殺されるというすさまじい弾圧としてあったことを忘れてはならない。天皇の軍隊そのものに手をかけた部落民への弾圧としてあったのだ。

今日、日帝の反革命戦争とファシズムへの突撃のただなかにあって、われわれは、国家権力に虐殺された幾多の部落民の無念さをかみしめ、二度の敗北は許されないのだということを胆に銘じなければならない！

戦争と天皇制ファシズムに屈服した全水の総括へむけて

全国水平社の綱領は、一九二六年五月第五回大会、一九二九年第八回大会において「改正」されてきた。そして、一九三七年三月三日、全水第一四回大会において、「我等は集団的闘争をもって政治的、経済的、文化的全領域に於ける人民的権利と自由を擁護伸張し、被圧迫部落大衆の絶対的解放を期す」と「改正」される。さらに、「国歌合唱、遥拝、黙禱」をおこない、同年六月十五日発表された新綱領「我等は国体の本義に徹し国家の興隆に貢献し国民融和の完成を期す」を決定するのである。

一九三七年七・七盧溝橋事件の勃発と全面的な中国への侵略戦争への突入というなかで、一九三七年・三八年の雪崩をうった総屈服の根拠について鮮明にしなければ、全水の戦争と天皇制ファシズムへの総屈服の総括は不十分であろう。

ここでは問題意識として述べるが、まず第一に、第一四回大会において削除された内容についてである。

「我々特殊賤部落民自身の行為によって絶対の解放を期す」については、「被圧迫部落民のみの行動によって絶対の解放が有り得るかの如き幻想を与え、排他的性質に歪曲し利用される危険性」として削除される。また、「我等は賤視観念の存在理由を認める故に現確なる階級意識の上に其の運動を進展せしむ」については、「被圧迫民衆の規定を身分として認識せず、身分的共通利害と共通意識によって結合された全国水平社の本質を理解しない誤謬をもっている」として削除された。

この点は、運動論的には、差別糾弾闘争論の未整理に表現されている部落差別の本質把握にかかわる問題であろう。当時の日共―コミンテルンの資本主義―帝国主義批判の水準ともかねあわせて検討していかなければならないが、部落差別＝封建遺制として把えており、天皇（制）についてもその延長に把えていく傾向があったのではないか。

一方で、いわゆる「解放令」の全面評価とそれに基づく天皇賛美が全水運動初期には多くみられるが、全水内で日共がヘゲモニーを握っていく二五―二六年以降の「アナ―ボル論争」、「全水解消意見」、「部落委員会活動」という論争点について、今日的に、部落解放戦略との関係で再検討・評価がせまられている。

第二に、全水指導部の治安維持法弾圧への敗北と転向問題への総括が皆無であることだ。

一九二六年大正天皇ヨシヒトの死からヒロヒトの即位（二八年十一月）、二七年金融恐慌―二九年大恐慌、二七年第一次山東出兵以降うち続く国侵略、二八年治安維持法（二五年施行）による三〇年三月一五日共産党への大弾圧というすさまじい戦争とファシズムの突撃のなかで、西光万吉はいち早く三・一五弾圧で転向を表明し、「マツリゴトの確立による高次的タカマガハラの展開」という天皇（制）下の「国家社会主義論」を主張するにいたっている。全水ボル派の先頭であった松田喜一、朝田善之助、北原泰作らは「部落厚生皇民運動」の先頭たち、松田は一九三八年二月中央委員会の場で、全水の政治的態度、即ち国家的立場からなされてゐる運動であり、云ふまでもなく反共（反人民戦線）の精神たることは従来も又今後も不変であることを鮮明にした。そして全水運動を国策の線に沿って展開すべきである」と自ら積極的に展開し、以降反共的反革命的な理論パッターとして位置をしめていく。

のみならず、松田らは積極的に全水の解消を提唱している。一九四〇年四月三日「神武天皇祭」を期し、講師として西光万吉をよび「部落厚生皇民運動全国協議会準備会」を開き、部落差別は「一君万民、万民一体の日本国体の冒瀆である」りその解決は「現下の国家的要請」だとし、そのうえで水平運動を「所謂部落問題の解決は従来の自由主義的乃至階級主義的運動によって招来されるものではなく、又政治的経済的諸矛盾を累増せしめつゝある資本主義体制の埒内においては望み得べくもない。《部落民》の真の解放とは人格の独立と尊厳とを基調とする国民一体の実現でありそれは日本国体の尊厳そのものゝ中に国体精神の高揚と国民精神の協同の中に実現されることを自己批判し、「今日も早や部落問題解決に役立ってゐないのみか逆にその切実物に転化した水平運動及び融和運動を止揚し新しき世界観と強き国家意識に立脚する解放運動が革新的国民運動の一環として勃興すべき歴史的段階に到達してゐる」と全水の解散を唱えるにいたるのである。

われわれは、これらの先達の敗北にきっちりと革命的批判を与え、今日的な総括を出しきらねばならない。当時かかえていた全水運動の困難さをていねいにひろいあげ、同時に日共による部落解放戦略と全水指導にかかわる領域の総括をもきっちりおこなわねばならない！

全国水平社の戦争と天皇制ファシズムへの屈服の総括は、七〇年代狭山―差別糾弾闘争、反天皇闘争、階級的共同闘争、三里塚武装決戦への進撃というなかで、実践的には回答が与えられてきている。この地平のうえにたって、今日、戦前―戦後部落解放運動の革命的総括を出しきり、部落解放路線・戦略・思想の整理と解放共同盟組織・運動論の整理、そしてわれわれの部落解放綱領作成―党部落民委員会の建設へとむかわねばならない。

天皇Xデー攻撃の煮つまりのなか、日帝の危機の煮つまりをわが方の絶好機としてとらえきり、飛躍点を鮮明にし、本格的権力闘争の飛躍をかちとれ！

差別主義天皇日共、全解連を粉砕し、差別主義反革命革マルを打倒せよ！

天皇主義右翼ファシスト撃滅！

反帝国際連帯で三里塚二期―天皇Xデー決戦に勝利せよ！

〈資料〉
戦争推進、居直りの

ヒロヒトの言辞

皇軍の忠烈を嘉す
〈一九三二年一月八日〉

義に満ちに於て事変勃発するや自衛の必要上関東軍の将兵は果断神速寡克く衆を制し速に之を圧討せり爾来艱苦を浸き祁寒に堪へ各地に蜂起る匪賊を掃蕩し克く警備の任を完うし或は嫩江斉々哈爾地方に或は遼西錦州地方に氷雪を衝き勇戦力闘して其禍根を抜き皇軍の威武を中外に宣揚せり朕深く其忠烈を嘉す汝将兵益々堅忍自重以て東洋平和の基礎を確立し朕が信倚に対へんことを期せよ
（柳条湖事件で関東軍を讃えた勅語）

首都・南京占領に深く満足
〈一九三七年一二月一四日〉

中支那方面の陸海軍諸部隊が上海付近の作戦に引続き勇猛果敢な追撃を行ひ速に首都南京を陥れたることは深く満足に思ふ此旨将兵に申伝へよ
（南京占領の攻略部隊を讃えたオコトバ）

戦果が早く挙がり過ぎるよ
〈一九四二年三月九日〉

御省はより御前に何候したるに、竜顔殊の外麗しくにここと遊され、余り戦果が早く挙り過ぎるよ」との仰せあり。七日ヨヤバ方面にバンドンの敵軍は降服を申出で、目下軍は聞印の全面降服に導かんとしつつあり、スラバヤの敵軍も降服し、又ビルマ方面にはラングーンも陥落せりとの話あり、真に御満悦の御様子を拝し、感激の余り眼には慶祝の言葉も出ざりき。
（『木戸幸一日記』）

もう一度戦果をあげてからでないと
〈一九四五年一月十四日〉

（敗戦局面での近衛に対し）
我国体について、近衛の考えと異なり、軍部では日本の国体変革も考えていると観測している……もう一度、戦果をあげてからでないとなかなか話は進まないと思う。
（『木戸幸一関係文書』）

征戦の目的を達成せよ
〈一九四五年六月九日〉

義に世界の大局急変、敵の侵寇亦倍々猖獗を極むに正に敵国の非望を粉砕して征戦の目的を達成し以て国体の精華を発揮すべきの秋なり朕は爾有衆の忠誠勇武に信倚し共に艱苦を分ち以て祖宗の遺業を恢弘せむことを庶幾ふ
（敗戦中最後の議会の御開院式での勅語）

国体を護持し得て終戦す
〈一九四五年八月一四日〉

朕は玆に国体を護持し得て忠良なる爾臣民の赤誠に信倚し常に爾臣民と共に在り若し夫れ情の激するが所為に事端を滋くし或は同胞排撃互に時局を乱り為に大道を誤り信義を世界に失ふが如きは朕最も之を戒む宜く挙国一家子孫相伝へ確く神州の不滅を信じ任重くして道遠きを念ひ総力を将来の建設に傾け道義を篤くし志操を堅くし誓て国体の精華を発揚し世界の進運に後れざらむことを期すへし爾臣民其れ克く朕が意を体せよ
（終戦の詔書）

三種神器を守るためにいで……
〈一九四五年九月九日〉

戦争をつづければ　三種神器を守ることも出来ず　国民も殺さなければならなくなったので　涙をのんで　国民の種をのこすべくつとめたのである
（皇太子への手紙）

琉球の軍事占領を希望
〈一九四七年九月〉

寺崎（天皇顧問）氏は、米国が沖縄その他の琉球諸島の軍事占領を継続するよう天皇が希望していると、言明した。天皇の見解では、そのような占領は、米国に役立ち、また、日本に保護をあたえることになる。天皇は、そのような措置は、ロシアの脅威ばかりでなく、占領終結後に、右翼および左翼勢力が増大して、ロシアが日本に内政干渉する根拠になるであろう。天皇は、そのような事件　をうけおさえることもおそれている日本国民のあいだで広く賛同を得るだろうと思っている。
（『ニューズ・ウィーク』インタビュー）

さらに天皇は、沖縄（およびその要とされる他の島じま）にたいする米国の軍事占領は、日本に主権を残したままでの長期租借――二十五年ないし五十年あるいはそれ以上――の賃貸借にもとづくべきであると考えている。天皇によると、このような占領方法は、米国が琉球諸島にたいして永続的野心をもたないことを日本国民に納得させ、また、これにより他の諸国――とくにソ連と中国が同様の権利を要求するのを阻止するだろう。
（米帝対日政治顧問シーボルトの「マッカーサー元帥のための覚え書」）

開戦は自分の責任ではない
〈一九七五年九月二十日〉

戦争終結の際、私は自ら決定を下しました。それは国内外の世論を考慮をまとめあげることができず、私に意見を求めたからです。私は自分の意見を述べ、それに基づいて決断しました。開戦時には閣議決定があり、私はその決定を覆すことはできなかった。これは帝国憲法の条項に合致すると信じています。
（『ニューズ・ウィーク』インタビュー）

民主主義の基盤は「五箇条の御誓文」
〈一九七五年九月二十二日〉

日本の民主主義の基盤は、明治時代の初期にさかのぼるものです。わが国の旧憲法は、明治天皇の「五箇条の御誓文」に基づいていました。私はこの五箇条が日本の民主主義の基盤であったと信じています。
（訪米前外国人記者団インタビュー）

原爆投下やむを得なかった
〈一九七五年十月三十一日〉

（いわゆる戦争責任について）
そういう言葉のアヤについては、私はそういう文学方面はあまり研究をしていないので、よくわかりませんから、そういう問題についてはお答えできかねます。
原子爆弾が投下されたことに対しては遺憾には思ってますが、こういう戦争中であることについてですから、どうも、広島市民に対しては気の毒であるが、やむを得ないことと私は思っています。
（帰国後日本人記者団インタビュー）

Xデーに関する

外国新聞報道

地獄が極悪天皇を待っている

―英紙「サン」九・二一

ヒロヒトが死の床に就いているとき、悲しむにはつらいわけがある。第一は、彼が生きるだけ生きたことだ。第二は、この暴力的世紀の汚らしい犯罪のどれも罰せられずに死ぬことだ。

彼の野蛮な兵隊が幾百万人もの無防備な中国人を暴行、殺りくしたとき、彼はなにもしなかった。幾十人もの連合国の戦争捕虜が殴打、餓死させられたとき、彼はなにもしなかった。…勝利が続いていた間は、ヒロヒトは世界の部隊でのさばり、偉大な将軍として振舞った。敗戦が確実になったとき、彼はその「神格」を脱ぎ捨てて、その值打ちのない首を救った。彼はなおも、彼が災いと原爆の惨禍に導いた騙れ易い、迷信に深い国民にたいする支配を維持していた。

彼が死ねば、彼にはまちがいなく地獄の特等席が約束されているだろう。

衰える悪の申し子

―英紙「デイリー・スター」九・二一

ヒロヒトの名のもとに、数えきれない儀牲者が筆舌に尽くしがたい残忍なやりかたで虐殺された。……拷問者たちによって傷を負わされた。ビルマ鉄道・泰緬鉄道」で、チャンギ監獄で、どこでも、戦争中、血塗れの昇る太陽の旗「日旗」がはためいた。

…ヒロヒトのためでさえ、涙はおそらく流されるだろう。しかし、彼や象徴したもののために苦しめられた人びとによってではない。彼らは彼の墓のうえで愉快に踊るだろう。

日本の天皇裕仁、病重く死に瀕す

―シンガポール紙「聯合百報」九・二七

裕仁天皇の昭和時代、日本の野心はさらに大きくなり、中国全体を征服しようとしたばかりか、いわゆる「大東亜共栄圏」をうちたてようとした。最後には、原爆の炎れにあい、無条件降伏公宣に言するまでおちぶれた。彼は戦犯となって刑を受けることもなく、厄運から逃れることができたことは、確かに運がよいといえるだろう。

裕仁天皇の逝去でシンガポール人はどんな反応をするだろうか？……年老いたシンガポール人にとっては、万感こもごも到るものだ。あるものは天皇と聞けば、即座に三年八カ月の「昭南」時代を連想し、検証、憲兵、日章旗と、そのすべてが心に湧き出てくる。日本語学校に入れられ、あ、い、う、え、お、と音読させられたことや、毎朝東京に向かって「宮城遥拝」をしたつらい記憶を連想する者もいる。

天皇重体―東京が暗い

―韓国紙「中央日報」九・二八

東京が暗くなっている。ヒロヒト天皇の危急を知らせるニュースがこの一週間くり返され、政街、官庁街、オフィス街はどんよりと曇り、紺や灰色の洋服に変わった。…（マスコミは）連日「国民が天皇陛下の快癒を祈っている」と大々的に書きたてることのみに汲頃しているかの感を与えている。

表紙の絵は、韓国の版画――

ユ・ヨンボク作―「恥辱に震えたある日」

刊行のことば

いまわれわれは新しい時代を むかえる門口に立っています。「世界恐慌」が叫ばれる帝国主義の危機の深まり、「大矢業時代」の到来、世界各国での戦争と労働者人民の虐殺、また日本における弾圧の激化と天皇（制）攻撃の強まりという時代は、ふたたび戦争とファシズムの時代の切迫を示しているというだけでなく、その危機のなかに新しい時代をきりひらく闘いの芽が生みだされ力強く育っていこうとする時代です。

こうしたなかで、労働者人民自身が闘いの展望を明確に掴むことがいまほど問われている時はありません。既成野党はもちろん、労働運動においても、反戦の闘いにおいても、体制内化は目を蔽うばかりです。そして、体制の側からのイデオロギー攻撃は、洪水のように氾濫しています。こうした時こそ、真に帝国主義と国家権力に対決し、労働者人民の勝利へむけた闘いの方針をはっきりさせることが問われています。

このために、私たちは、労働者人民の闘いの武器となることを願って、『労働者ブックレット』を刊行しました。このブックレットは、闘いの多くの課題を一つひとつなるべく系統的に、しかもわかりやすく明らかにすることを課題とします。多くのみなさんが、このブックレットを闘いの武器として活用されること、また批判や要望によってこのブックレットをより豊かに、より使いやすいものとして育ててくださるよう願ってやみません。

一九八六年四月二十九日

労働者ブックレット 2
Xデーと天皇制
―今こそ天皇制をなくせ
1988年12月1日発行
定価600円 送料200円
発行 現代社
東京都杉並区下高井戸1―34―9
第一セーガビル
電話 03―329―0164
振替 東京 0―142518
現代社